

校内研修ハンドブック

—授業研究の充実を目指して—

平成 19 年3月

京都府総合教育センター

は じ め に

平成18年12月15日、新しい教育基本法が、第165回臨時国会において成立し、12月22日に公布・施行されました。

新しい教育基本法では、第九条で「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」とされ、教員の使命と職責の重要性を踏まえ、教員は研究と修養に励むべきであると新たに規定されました。教員の職責を遂行するために、研究と修養の重要性を再認識したところであります。

研究と修養の基本は、教員自身による自己研究と自己修養にあります。その成果をより一層高めていくためには、教員相互による啓発が必要であり、この啓発の場が校内研修であると言えます。

本ハンドブックは、校内研修を企画・運営する先生方のために作成しました。児童生徒に分かりやすい授業をし、学ぶことの面白さを伝え、確かな学力を付ける「授業力」の向上を目指す観点から、校内研修における授業研究に主眼を置き、実践的で先進的な手法を収めました。

また、一括配付後に最新の情報や実践例を追加配付していくことで、日々変化していく教育実践に即したものをタイムリーに提供できるようにしていきます。

21世紀を担う子どもたちが確かな学力、豊かな人間性、健康や体力などの「生きる力」を身に付け、夢や希望を持って世界にはばたく人間として育つことを願ってやみません。本ハンドブックがその一助になれば、幸いです。

平成19年 3 月

京都府総合教育センター所長

本書の作成に当たって

1 作成のねらい

本資料は、校内研修（授業研究）の企画・運営の参考になる事例等を収集し、効果的な校内研修が行われるための手法や参考例を学校に提供することをねらいとして作成しました。

授業研究中身の濃いものにしていくためには、授業者自身が児童生徒観、教材観、指導観を見つめ直し、しっかりと練り上げた学習指導案を作成して、それをもとに事前研究・事後研究をしていくことが重要です。しかし、それだけではなく、参加者全員が意見を出しやすくなるような工夫もしていかなければなりません。

また、日々の授業を改善するためには、すべての教員が普段の授業を公開してお互いに参観し合い、率直に意見を交わすことが大切です。そのためには、これまでとは違った授業の公開の仕方を工夫する必要もあります。公開する授業が増えれば増えるほど、その目的に応じた方法を工夫して省力化と効率化を図らなければなりません。

本書は、校内研究を推進する立場にある先生方に是非とも活用していただきたいと思います。

2 構成について

校内研修（授業研究）を活性化、深化する上での課題をQ & Aで示しています。全体を「授業研究の意義」「授業研究の方法」「授業研究の課題」「授業研究の展開」の四つに分類し配列していますが、最初から順番に読んでいただいても、各学校の状況に合わせて必要なページから読んでいただいてもよいように考えています。

3 参考例について

本書に掲載している参考例は、京都府内の学校からご提供いただいた実践例や、京都府総合教育センター「小・中学校授業実践指導者養成特別講座」の内容を参考に作成したものです。言うまでもなく参考例はヒントの一つであり、それが改善のためのベストの方策というわけではありません。今後、各学校から実践例の提供を受け、成果をセンターで蓄積し、研究を進めることにより本資料の実践事例を発展させる予定です。

目 次

PART 1 授業研究の意義

- Q 1 このハンドブックは、どのように活用するのですか？ 1
- Q 2 授業研究にはどのような意義がありますか？ 3

PART 2 授業研究の方法

- Q 3 授業研究にはどのような方法がありますか？ 5
- Q 4 研究授業は、どのような視点で参観するのですか？ 7
- Q 5 本校には、研究授業の記録ビデオが多数ありますが、よい活用法はないでしょうか？ 9
- Q 6 模擬授業には、どのような意義があるのですか？ 11
- Q 7 事後研究会での協議が深まりません。何かよい方法は？ 13
- Q 8 事後研究会での意見が少なく、協議が深まらないのですが？ 15
- Q 9 授業研究を深めるにはどうすればよいですか？ 17
- Q 10 授業研究を深めるために外部の力をどのように活用すればよいでしょう？ 19

PART 3 授業研究の課題

- Q 11 教員の意識を高めるにはどうすればよいですか？ 21
- Q 12 授業研究についての共通理解を図るためにどうすればよいでしょう？ 23
- Q 13 みんなで授業を見合う雰囲気をつくるよい方法は？ 25
- Q 14 まずは、授業研究をスタートさせたいのですが……。 27
- Q 15 授業を公開する際の指導案作成に時間がかかります。何か簡単な方法は？ 29
- Q 16 効率的に授業研究会を行うにはどのような計画がよいですか？ 31
- Q 17 授業研究が単発に終わります。継続性をもたせるには？ 33
- Q 18 研究授業が多くなると、自習の時間が増えますが、何かよい方法は？ 35
- Q 19 教員数が少なく、校内研修がマンネリ化しがちなのですが？ 37

PART 4 授業研究の展開

- Q 20 校内研修を構想・計画するに当たって、どのような視点が必要ですか？ 39
- Q 21 様々な教育課題に対応するための、効率的な授業研究の方法はありませんか？ ... 41
- Q 22 授業研究で教科の壁を越えるためには、どうすればよいでしょう？（1） 43
- Q 23 授業研究で教科の壁を越えるためには、どうすればよいでしょう？（2） 45
- Q 24 授業研究で教科の壁を越えるためには、どうすればよいでしょう？（3） 47
- Q 25 初任者や若年層の教員が多く、授業力の向上が緊急課題なのですが……。 ... 49
- Q 26 教員個々に、校内研修へのニーズに差があります。この点をどう考え、
どう対処すればよいでしょう？ 51

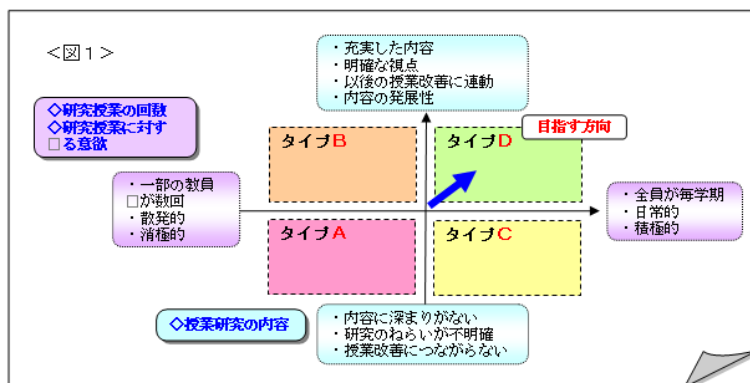
教員の研修及び資質能力の向上に関連する法令、答申等 i

引用・参考文献等

ハンドブックの使い方

まずはじめに

あなたの学校での授業研究の現状分析から始めます。
1 ページ下にある図 1 を見てください。



仮にあなたの学校の授業研究の現状は、「内容は充実しているものの一部の教員が数回断片的に実施している」としましょう。
図 1 からあなたの学校は**タイプB**と分析できます。

次に

2 ページの図 2
タイプBの場合を見てください。
「まずここから」がワンポイントアドバイスです。

そして

「参考となるQ」に載っているものを読んでみてください。
ここでは、Q13 を読んでみることにしましょう。



校内研修ハンドブック

京都府総合教育センター 平成 19 年 0 月 0 日

～授業研究の充実を目指して～

No.13

ライフ A B



Q13 みんなで授業を見せ合う雰囲気をつくるよい方法は？

Point

事前準備の時間が取れない、授業の観覧をされたくないなどの理由で授業を見せ合う雰囲気がない学校では、次のような方法が考えられます。

- ① 全員が一斉に授業を見せ合う期間を設定する。
- ② 授業を見せ合ってよかったと思える方法を考える。

1 全員が一斉に授業を見せ合う

日頃から気楽に授業を見せ合う雰囲気がない学校では、学期に一度の公開授業週間を設定してはどうでしょうか。公開授業週間は、全員が1回の公開授業の時間を決めます。中学校では授業を担当しない「空き時間」がありますので、その時間に参観します。時間割を変更することなく、各自にしたりしないで実施することがこの方法では、それぞれの公開授業を設定することが困難ですが、参観したアンケートを手渡ししたり、学年会したりする方法が考えられます。

また、公開授業週間を保護者や地域に知らせることで、学校の取組を理解して参観に来ていただくことができます。研究授業ではきっちりと練り上げた授業を行います。また、学習指導案を作成する上で重要ですが、みんなで見せ合うで行う公開授業週間では、以下の方法でどうでしょうか。

2 見せ合ってよかったと思える方法

- ① 授業者がどのような課題をもって授業を行うか。
- ② 公開授業ではどのような点を見て参観してほしいか。
- ③ どのような視点でのアドバイスを希望するか。

授業を見せ合うことで、日頃の悩みの解消、互いにアドバイスをし合い、本音の意見を伝えることができるようになります。教員が授業を見せ合うことのよさを

AからDのどのタイプに対応した内容かが分かります

目次の項目と一致しています。目次から検索できます。

ポイントを読めば解説の概要が分かります。

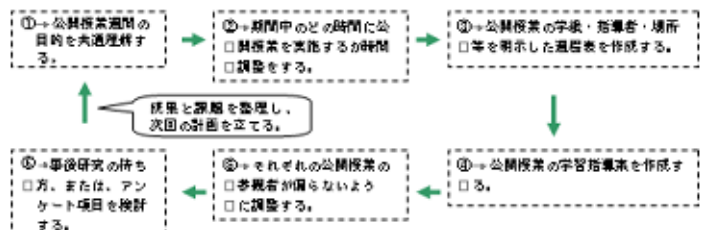
ポイントの項目と対応しています。

参考例

全員が授業を公開する例

～学期に1度の公開授業週間を設定する～

公開授業週間の計画の立て方の例



「アドバイス交換メモ」の例

① 本時の授業の目的と「工夫点や見所」等のポイントを確認して印刷します。

② ①のプリントを、参観者ごとに事前配付します。

③ 参観者は、「参観者の意見」の欄に感想やアドバイスを書いて授業者に渡します。

④ 参観者は、授業者の求めに応じてアドバイスに添える感想や意見を書く。

⑤ 参観者は、授業者の求めに応じてアドバイスに添える感想や意見を書く。

⑥ 参観者は、授業者の求めに応じてアドバイスに添える感想や意見を書く。

実践例や具体的な方策をあげています。学校の先生方のお話もできるだけ取り上げました。

実践に際しての注意点やヒントになることを数多く載せています。

実践のポイント

まずは、気楽にみんなが授業を見せ合う雰囲気をつくるのが大切ですが、最終的には、共通の研究主題を設定し、教育課題の解決を目指した授業研究を計画的・継続的に推進することが重要です。

ヒントボックス

公開授業週間を保護者や地域の人への参観と重ね合わせ、教員とは別の視点での感想や意見を聞くことも、授業を考える上で参考になります。



Q 1 このハンドブックは、どのように活用するのですか？

Point

- ① 授業研究を充実するための二つの視点
「授業研究の活性化」と「授業研究の内容の深化」
- ② 活用の手順
「現状把握」→「まずここから始めよう」→「参考となるQ」へ

1 本資料の内容

教員の主体的な授業研究を進め、より充実した授業研究を推進するためには、次の二つのことを並行して段階的に進めることが必要です。

一つは「授業研究を活性化すること」で、もう一つは「授業研究の内容を深める」ということです。

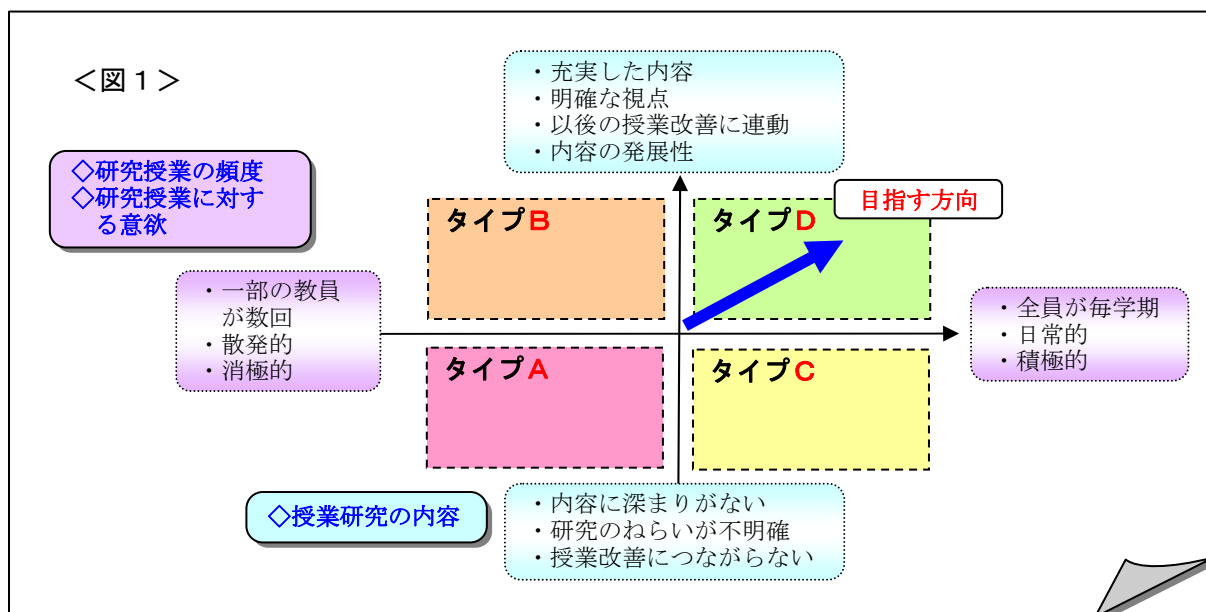
そこで、本書は、これらの内容を「ハンドブックの使い方」に示したように、Q & A形式で、段階的に配列しました。それぞれのQ & Aには、モデルとなる参考例を紹介しています。

それぞれの学校のニーズに合ったページを参考としてください。

2 まず、現状把握から

教員の授業力向上のためには、授業研究の充実が求められますが、まずは、「活性化すること」と「内容を深める」ことの両面から各校の授業研究の状況を把握し、徐々に改善の手立てを打っていくことが大切でしょう。

下の〈図1〉は、「研究授業の回数や研究授業に対する意欲」と「授業研究の内容」の二つの面から、簡単に現状把握するため



3 「参考となるQ」を見てみよう

のものです。

授業研究の状況は、この二つの側面からみたときに、図中のAタイプからDタイプのどの領域に位置するでしょうか。

＜図2＞には、それぞれの典型的な状況例と今後の方向性を簡単にあげました。各学校の状況と照らし合わせ、右にある「参考となるQ」をご覧ください。校内研修（授業研究）充実に向けてのアイデアが見付かるはずです。



＜図2＞

タイプAの場合

授業研究を実施することにほとんどの教員が消極的で、一部の教員が1年間に数回授業を公開する程度
事後研究会の発言も少なく、内容的に深まりのない状況

まずここから

授業を公開する機会を増やし、教員が相互に授業を参観し合うことに抵抗感をなくしていく必要があります。

参考となるQ

Q 3, Q 5, Q 6,
Q 8, Q 11, Q 12,
Q 13, Q 14, Q 15,
Q 22, Q 23, Q 24

タイプBの場合

授業研究会の回数は少ないものの、事前研究や事後研究の内容は充実しており、授業の改善につながっている状況

まずここから

全教員が気軽に行える授業研究会の工夫を行い、授業研究会の回数を増やしていく必要があります。

参考となるQ

Q 5, Q 6, Q 7,
Q 13, Q 15, Q 16,
Q 17, Q 18, Q 19

タイプCの場合

全教員が年に1度は授業の公開を行ってはいるが、事前・事後の研究会は深まりに欠け、授業改善にまで至らない状況

まずここから

授業改善の方向を明確にして、授業研究の方法を工夫し内容の充実を図ることが必要です。

参考となるQ

Q 3, Q 4, Q 6,
Q 7, Q 8, Q 9,
Q 17, Q 22, Q 23,
Q 24

タイプDの場合

全教員が年に1回以上の研究授業を行い、明確なねらいに沿って事前・事後の研究会が計画的に行われ、確実に授業改善が進んでいる状況

更なる充実のために

研究を的確に評価し、内在する課題の顕在化・焦点化の工夫を行い、より高い目標を目指して一層の充実を図りましょう。

参考となるQ

Q 6, Q 7, Q 9,
Q 19, Q 20, Q 21,
Q 23

AからDの共通 → 校内研修を考える

自校の校内研修全般について見直したり、新たに計画したりするに当たって、より広い視野で「校内研修」をとらえ直すことが大切です。

参考となるQ

Q 2, Q 10, Q 11,
Q 17, Q 19, Q 20,
Q 21, Q 25, Q 26





Q 2 授業研究にはどのような意義がありますか？

Point

校内研修や授業研究は、教員として職務を遂行していく上で大きな意義があります。

- ① 教員としての専門性を磨くことになります。
- ② 教員の資質能力の向上は、そのまま児童生徒の成長につながります。

1 教員としての専門性を磨く

「よい授業をしたい！」と思わない教員は一人もいないはずです。「よい授業」をはじめとして、私たち教員は、教員としての専門性を磨くために様々な研修や研究を行っています。

学校を離れて行う校外研修では、概ね、教員のライフステージや今日的課題に対応した研修が体系的に組まれています。学校を離れて、客観的に自己の実践を振り返りながら研修したり、新しい知識や技能を習得したりすることができます。また、校外研修で学んだことを校内研修や日常の実践に取り入れて学校や自分自身の力にしていきます。

一方、校内研修は、具体的な仕事を通じて教員の資質能力の向上を図る研修(On-the-Job Training)です。子どもの成長を確かめながら実践から学ぶ、そして日常的に行えるという特色があります。同僚と協働しながらみんなが高まり合うとともに、特色ある学校づくりにつながるものです。「教師は現場で育つ」という言葉があります。教員が育つ環境づくりが必要です。

2 児童生徒の成長のために

校内研修は、各校の学校教育目標等に基づき計画的に実施されています。そして具体的な研修内容は、地域や児童生徒の実態を踏まえて、授業研究や人権教育、生徒指導等、様々な研修が行われています。すなわち、教育実践に即した課題を研究主題として設定することで、日常の実践の中で直接児童生徒に働きかけながら課題を解決していくことになります。その研修と指導の取組過程において、研修の成果を児童生徒の変容という形で確認しながら進めることができます。

校内研修の意義

－ 「教師力」の向上を目指して －



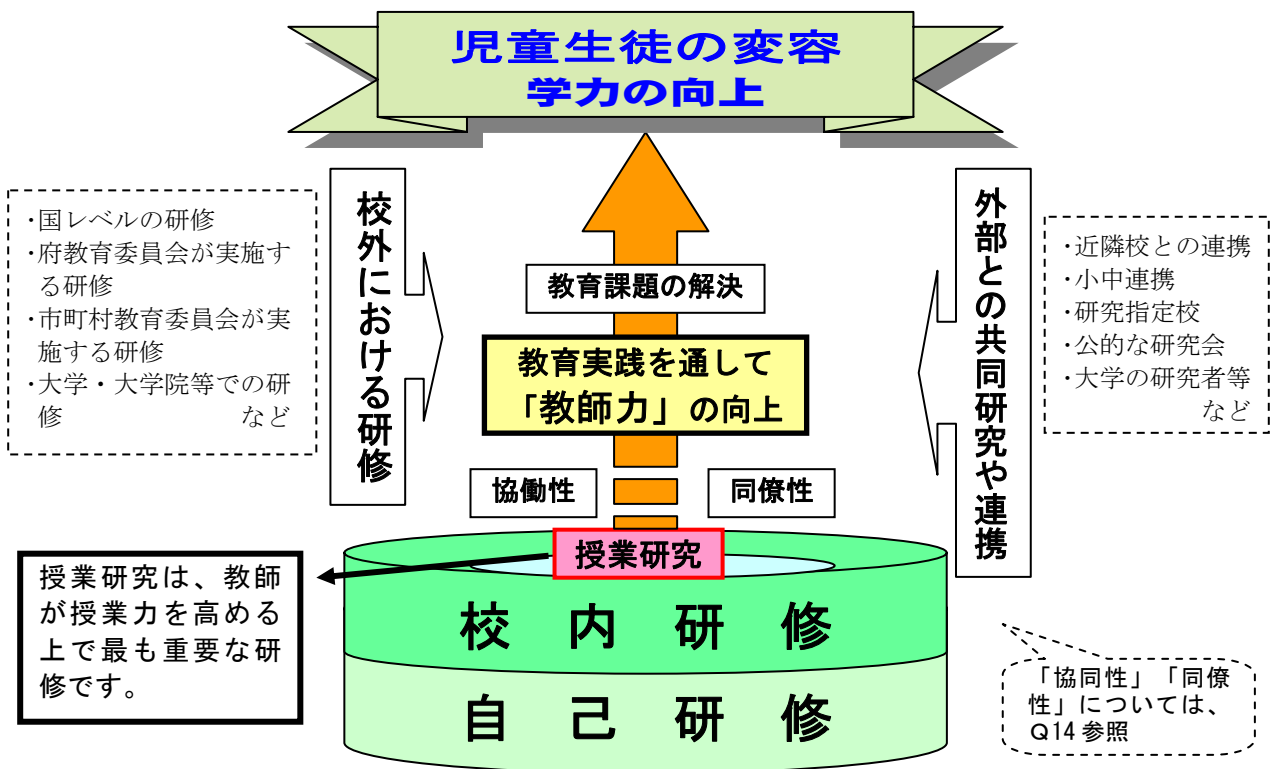
「具体的な人材育成方策」に関する提言

京 都 府

「教師力」向上に関する検討委員会（平成18年11月20日）

【研修段階】－「教師力」の向上

○ 学校は教員の資質能力を向上させる基本的な場であり、各学校が自律的に人材を育成する仕組みを構築するために、校内研修の活性化を図るとともに、教員が主体的な取組を行うための環境を整備する。



新しい時代の義務教育を創造する（答申）

中央教育審議会（平成17年10月26日）

教育の専門家としての確かな力量

「教師は授業で勝負する」と言われるように、この力量が「教育のプロ」のプロたる所以である。この力量は、具体的には、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるものと言える。

今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）

中央教育審議会（平成18年7月11日）

各学校においては、魅力ある職場づくりを進めるため、教員同士が学び合い、高め合っていくという同僚性や学校文化を形成することが必要である。このため、個々の教員の能力向上だけでなく、学校におけるチームワークを重視し、全体的なレベルアップを図るという観点から、校内研修の充実に努める必要がある。また、有機的、機動的な学校運営が行われるよう、校務分掌などの校内組織の整備や、個々の教員の知識・経験を他の教員も共有できるよう校内体制づくりを進めていく必要がある。



Q 3 授業研究にはどのような方法がありますか？

Point

授業研究には様々な方法があります。学校の状況により、いろいろな方法を組み合わせることや独自のやり方を工夫することが大切です。

- ① 直接に研究授業を参観し、授業者と参観者との協議により深める。
- ② 前もって録画した授業ビデオを視聴して協議する。
- ③ 同僚教員や参加者を児童生徒に見立てて模擬授業をする。
- ④ 参加者が各自の授業実践の資料を持ち寄り交流する。

1 直接に研究授業を参観する

最もよく行われる研究授業の形態です。参加者が直接に授業を参観することで、児童生徒の様子や学級全体の雰囲気を共有した上で研究を深めることができます。なお、研究授業を行う際には、他学級の授業を自習にすることなどが多くなり、他学級の児童生徒に対する配慮が必要になります。

2 授業ビデオを視聴する

授業をビデオ録画することで、放課後に授業研究会をすることができ、再生を途中で停止したり、繰り返し見たりすることができますなどの利点があります。一方で学級全体の雰囲気が分かりにくい、ビデオを撮影したり編集したりする人の主観が入るなどの問題点もあります。固定したカメラで児童生徒の様子を中心に撮影するなど、研究のねらいに合わせて工夫することが大切です。

3 模擬授業を行う

児童生徒を対象にするのではなく、同僚教員や参加者を児童生徒に見立てて授業を行う方法です。児童生徒役の教員が児童生徒の予想される反応をできるだけ多く演じることで、授業者や参加者の授業構想の参考になります。模擬授業を踏まえて学習指導案を再検討するなどに活用できます。

4 授業実践の課題等を持ち寄る

授業者が、自己の授業の課題等を解決するために実践した授業を振り返り、資料としてまとめます。その資料を基に、他の参加者と意見交流する中で、授業改善のための様々な方策を考え、授業力を高めていく方法です。



授業研究の方法

— 児童生徒の視点で授業を見る —

授業モニター

- 教室の後ろに立っての授業参観となると、どうしても指導者の立場で授業を見ることになります。そして、指導者の立場で考えると中学校では「教科の壁」が気になります。しかし、児童生徒はすべての教科の授業を受けています。「授業モニター」は、児童生徒の視点で授業を見て考えます。

教室に生徒机を運び込み、教員も生徒と同じように授業を受ける。



事後研究会の観点

- ・ 授業は楽しく興味がわいたか。
- ・ 授業の内容がよく理解できたか。
- ・ 指導者の指示や発問は分かりやすかったか。 など

マイクロティーチング

マイクロティーチングは、授業の一部を模擬授業で行い、参加者で反省的に考察する方法です。

○センターの初任者研修講座でマイクロティーチングを行いました。

- ・ 中学校の初任者を5名ずつの教科混合グループに分けました。
- ・ 各グループには、授業者が一人ずつ決まっています。
- ・ 授業者一人につき、20分の模擬授業をします。
- ・ 参観者は、生徒の役割を演じます。
- ・ 各グループで事前研究・事後研究を行います。



事前研究

各グループで、授業者の学習指導案をもとに協議

- ・ 単元のねらいと本時の位置付け
- ・ 本時の目標と学習活動の概略
- ・ 模擬授業をする過程（場面）の確認
- ・ 予想される生徒の反応と指導者のはたらきかけ など

模擬授業

- ・ 一人につき20分の模擬授業、
- ・ 参観者は、「相互評価票」を記入(10分)

「相互評価票」は、授業者に渡します。

事後研究

各グループで、授業者の模擬授業をもとに協議

- ・ 学習のねらいを達成できたか。
- ・ 生徒の反応に対し、適切なはたらきかけができたか。
- ・ 模擬授業から各自が学んだことは何か。 など

グループの報告

- ・ 各グループで話し合ったことを全体に報告
- ・ センター所員からの指導と講評

実践のポイント

マイクロティーチングは、導入であったり、展開の後半部分であったり、授業者の課題とする場面のみを行います。少ない時間で多くの模擬授業を実施できます。

ヒントボックス

児童生徒と同じように授業を受けることで見てくることがあります。

改めて、よい授業とは何かを問い直すきっかけにもなります。



Q 4 研究授業は、どのような視点で参観するのですか？

Point

授業研究のねらいによって参観の視点は異なってきます。様々な分類の仕方がありますが、次のように分類することもできます。

- ① 指導技術と授業の基盤づくりを中心とした参観の視点
- ② 授業デザインと目標達成を中心とした参観の視点
- ③ 学習指導案と授業者の意図を中心とした参観の視点
- ④ 研究仮説の検証を中心とした参観の視点

授業研究は、指導と評価の一体化による児童生徒の学力向上や授業改善、また、教員の授業力向上など授業実践における課題解決を目指して行われますが、次のような視点が考えられます。どのような視点で行う授業研究かを共通理解することが大切です。

1 指導技術と基盤づくり

授業を進めるために必要な指示や発問、板書などの技術の向上や授業の成立の基盤となる児童生徒理解や学級経営、授業規律など、教材研究や授業デザインなどに先立つ授業の基礎的・基本的な事項が授業研究のねらいになります。初任者研修や若年層の研修では、このような視点での授業研究をよく行います。

2 授業デザインと目標達成

同じ教材でも、ねらいとした学力を児童生徒に付けさせるために、様々な授業展開や学習活動が考えられます。様々な授業展開から授業者が選択した授業展開が目標達成に迫るものであったかどうか、また、他の授業展開や学習活動の方が児童生徒の学びにとってより効果があるのではないかなどを交流することによって、授業デザインなどについて深めます。

3 学習指導案と授業者の意図

授業者は、児童生徒のレディネスなどを参考に様々な反応を予測し、その対応を考えながら効果的な授業展開を考え学習指導案を作成します。しかし、実際の授業実践では授業者の予測しない児童生徒の反応があり、瞬時に多くの対応の選択肢から一つを選び次のはたらきかけをします。事後研究では、その時々授業者の意図を読み解くことによって効果的な授業展開を模索します。

4 研究仮説に沿った実践

研究指定校等では児童生徒の能力を向上させるために、研究仮説を立てて検証するという方法を取り入れることがよくあります。研究仮説に沿った実践が有効であったか、改善点はないかなどを視点として参観します。有効性が検証された仮説は、多くの教員や学校で活用できる取組になります。

※1



研究授業を見る視点

— 授業の評価票 —

授業参観の評価票（チェックシート）作成例

○ 小・中学校授業実践指導者養成特別講座における演習で、授業の評価票を作成しました。

《手順》

①ブレンストーミング

グループで授業参観の視点をしてできるだけ多くリストアップする。

②授業を見ながら検討

実際に授業を見ながら、リストにもれ落ちがないかを更に検討する。

③研究主題に合わせて作成

②で作成したリストから研究主題に適したものを選び、整理する。

《サンプルA》

番号	観点の項目	評価欄
1	生徒が教師の話に耳を傾けている	
2	生徒が授業の準備物をしっかりと用意しているか	
3	教室の環境整備がされているか	
4	学習規律がととのっているか	
5	あいさつができているか	
6	生徒との信頼関係が確立されているか	
7	発表や発言がしやすい集団を作っているか	
1	板書が見やすい読みやすいか	
2	指示の出し方は適切かどうか	
3	考える時間や板書を写す時間が保障されているか	
4	説明は具体的であったか	
5	生徒の反応を予想した適切な発問ができているか	
6	個々の生徒の学習活動に授業者が注意を払っているか	
7	教師の言葉がゆっくり丁寧に聞き取りやすいか	
8	生徒を生き生きと活動させているか	
9	言葉文字だけでなく視覚聴覚等に訴える工夫が	
10	時間配分は適切であったか	
11	導入段階で生徒に興味関心をもたせているか	
12	授業の流れにテンポやリズムがあるか	
13	生徒の反応に適切に対応して授業が進められるか	
14	指導や助言が適切にできているか	
15	机間指導を適切に行う	
16	本時のねらいが明確化されているか	
1	授業の山場と本時の目標がつながっているか	
2	学習目的が明確であったか	
3	板書計画がねられているか	
4	目標達成に応じた学習形態がとられているか	
5	資料等が展開の中で効果的に生かされているか	
6	目標に沿った発問がされているか	
7	支援や助言が目標達成のために適切に行われているか	
8	授業目標に沿った指導案が考えられているか	
1	目標が達成されているか	

《サンプルB》

	教師	生徒
導入	○ 生徒の興味関心を引き付けるための導入の工夫や教材 ○ ねらいの提示が明確	○ 本時のねらいを生徒が把握しているか
展開	○ 課題の内容が適切であったか ○ 考えるための手立ての工夫ができていないか ・ 時間の保障 ・ 個別の指導 ・ 適切な助言	○ 課題の内容を適切に理解しているか ○ 課題に積極的に取り組んでいるか
まとめ	○ 練り合いの場面で学習を深めていくための手立てができていないか ・ 発問の工夫 ・ 教具の工夫 ・ 教師の的確な支援 ○ 発表させるための手立てが工夫できているか ・ 発表しやすい雰囲気 ・ 生徒の意見を適切に評価 ○ 目標に対するまとめができていないか	○ 練り合いによって学習が深められているか ・ 自分の思いや考えを自分なりの方法で表現できているか ・ 他者の意見が聞いているか ○ わかりやすく伝えているか ○ きちんと話が聞けて理解しているか ○ 考えることに喜びを味わえているか ○ 意欲的に伝えようとしたか。

実践のポイント

サンプルAは項目を観点で分類してまとめたもの、サンプルBは時間軸に沿って整理したものです。これらの作業を通して、参観の視点の共通理解を図ることができます。

ヒントボックス

これらの評価票を持ちながら授業を参観し、それぞれの状況について評価をメモしておくことで、事後研究会において共通の視点で協議することができます。

タイプ

A

B



Q 5 本校には、研究授業の記録ビデオが 多数ありますが、よい活用法はないで しょうか？

Point

- ① 過去の授業記録ビデオは、授業研究に活用できる貴重な財産です。
- ② 実際の授業を参観すること以外にも、授業研究の方法を工夫する。
- ③ 授業を記録に残し、多様な活用方法を考える。

1 ほこりをかぶ った授業の記録 ビデオ

多くの学校は、過去に研究指定を受け、研究発表会をしているものです。その際、公開した授業をビデオに撮り保存していることがよくあります。ところが、それらの多くが再び活用されることなく、そのままほこりをかぶっているのではないのでしょうか。

2 研究授業の記 録ビデオは貴重 な財産

これらの記録は、次のような理由から、とても貴重な財産だと言えます。

- ① 研究協議を重ね、練り上げた研究授業には、優れた授業が多い。
- ② 若年層が一層増加する時代を迎えると、名人技とも言えるベテラン教員の授業は次第に見られなくなる。

こう考えると、現在残っているビデオは、その学校にとっても、これからの教員にとっても非常に貴重な財産であると言えます。是非とも劣化を避けてデジタルデータとしてDVD等に整理し直し、大切に保存するようにしたいものです。

3 授業参観以外 にも、授業研究 の方法を工夫す る

授業研究というと、学習指導案を書いて事前研究会をし、授業参観の後に事後研究会をするといった、お決まりのパターンにこだわりすぎてはいないのでしょうか。過去の授業記録ビデオを教材として、多くのことを学ぶことが可能です。これもまた授業研究と言えます。たとえば、検証授業をすとか、同じ授業ビデオを各自が視聴してレポートを書いて協議をすとか、視点を決めて複数の授業を比較してそこから学ぶ等々、いくらかでも研究方法が考えられます。まずは、方々に散在しているビデオのほこりをはらって、職員室の目に付くところに置くところから始めましょう。



授業ビデオライブラリー作り －「授業を見る視点」ごとにビデオを整理－

本校の実態

- ◇ 本校は、かつて研究指定校として盛んに研究が行われ、授業記録ビデオが多数残っている。
- ◇ 現在は、若年層の教員が多く、授業研究をするが学ぶべき授業も少なく、事後の研究協議も深まらず、ややマンネリ化している。

取組のねらい

- 1 過去の財産とも言うべき研究授業の記録ビデオを、活用しやすい資料として整理し、校内ビデオライブラリーを整備する。
- 2 「授業を見る視点」を検討して、その視点ごとに記録された授業内容を分析し、「ビデオ整理カード」に整理する。

実践の流れ

① ビデオのデジタル化
ビデオ整理カードの検討

② ワーキンググループ（低中高学年等）ごとに、毎月作業日を設定

個別作業
各自に分担された授業ビデオを視聴し、「ビデオ整理カード」に記入

グループ別作業
個別に作成した「カード」の記述内容の検討
※代表ビデオを選びグループ内で視聴して、カードの記述内容と比較検討

③ 長期休業中に全体会

全体協議
各グループで作成した「カード」の記述内容の検討
※代表ビデオを選び全員で視聴して、カードの記述内容と比較検討し、修正を加えて「ビデオ整理カード」登録

「授業改善の視点」、「授業規律」、「発問・板書等」、「机間指導等支援の仕方」、「個に応じた指導」、「教材・教具の工夫」、「児童の発言や主体的な学び」、「評価・ねらいの達成度」等を記入

例「ビデオ整理カード」

〇〇小学校「授業ビデオライブラリー」整理カード		
整理番号		
授業日 (研究会名)		
学年・教科		
単元名		
授業者名	〇〇小学校「授業ビデオライブラリー」に登録し、活用されることを受諾します。	印
本授業の特長 (参考にするべき点)		
記載者		

教員の声



- ◇ 過去の授業ビデオをじっくり視聴してみて、随分と練られた授業のすばらしさに感動しました。
- ◇ 指導者の発問に対する児童の発言も、何度か巻き戻して聞き直すことで大変勉強になりました。

実践のポイント

整理の仕方を考えることも大事な研修です。「ビデオ整理カード」の様式を工夫しましょう。

ヒントボックス

過去の授業ビデオの整理だけに終わらず、自分たちの授業をライブラリーに加えることで、よりよい授業の創造を意識化することができます。

タイプ

A

B

C

D



Q 6 模擬授業には、どのような意義があるのですか？

Point

- ① 授業者も児童生徒役も、参加者全員の授業力が向上する。
- ② 授業研究や授業改善への意欲につながる。
- ③ 授業研究の充実が期待できる。

1 授業者にとって

特に経験の浅い教員にとって、授業を構想する段階で最も困難なことは、児童生徒の反応を予想することです。模擬授業には多くの効果がありますが、一番大きな意義はここにあります。

児童生徒役が、指導者の発問や説明、設定した学習活動において児童生徒の実態に即して多様に反応することで、予想の幅が広がりその対応策が検討できるのです。そして、頭の中で考えていたことと実際とのギャップが明らかになり、次のような力の育成につながります。

- ☆ 的確な発問の力が付く。
- ☆ 分かりやすい板書の力が付く。
- ☆ 時間配分がうまくなり、中心となる学習活動に時間がとれるようになる。
- ☆ 児童の反応に的確に対応できる力が付く。

2 児童生徒役にとって

また、学習指導案の検討協議だけに終わるのと比べて、児童生徒役が教員にとっても得るものがたくさんあります。

- ☆ 児童生徒の立場で授業を構想する習慣が付く。
- ☆ 授業研究の必要性を実感できる。

3 授業研究の充実のために

実際の授業を参観してもらうよりも、緊張せず気楽にできることから、日常的に行うことができ、次のことも期待できます。

- ☆ 授業研究への意欲、授業改善への意欲がわき、特に経験年数の浅い教員に自信が付く。
- ☆ 校内の教職員の授業研究に対する意欲向上につながる。

さらに、

- ☆ 事前研究として取り入れることで、本番の授業参観への課題意識が高まり、事後研究会が充実したものになる。

以上のように、模擬授業の活用によって、授業研究が充実することが期待できます。



模擬授業を通して見えてきたこと

- ◎ 授業者は、教職2年目で初めて1学年を担当する教員
- ◎ 「学習指導案を見てほしい」ということだったので、1時間だけ時間をとることに
- ◎ せっかくだから、何人かの若い教員に声をかけ、模擬授業をすることに
- ◎ 場所は、授業者の教室

こんな進め方をしました

<準備物>

- ・学習指導案と使用する教材教具類
- ・タイマー（時間延長はしない）
- ・デジタルカメラ（板書を撮影）
- ・ボイスレコーダ（授業、事後研究会での参加者の意見等すべて録音）

教員の声



15 分間の事前研究

- ◎ 授業者の説明
 - ◇ 本単元で扱う教材は……のような内容です。
 - ◇ 児童は……のような実態で、……の力を育てたいと考えています。
 - ◇ 本時は、単元の中の……の学習をする時間です。

自分の言葉で説明することで、それまで気付いていなかったこと、曖昧だったことが何であるかがはっきりしました。

- ・教材提示のタイミングや順序
- ・発問の内容
- ・板書の位置や整理の仕方等々の改善に役立ちました。

15 分間の模擬授業

- ◎ 導入は省いてすぐに展開部分に
- ◎ 児童役は、指導者のはたらきかけ（発問や指示、教材提示等）だけをもとに、反応（挙手、回答、作業、思考）する。
- ◎ タイムオーバーですぐに終わる。

児童役感想

「あの発問では何を考えるのか、何を答えるのかが分からない」「間の取り方が悪い」「活動時間が足りない」等々、児童役になって初めて気付くことがたくさんありました。

30 分間の事後研究

<協議の柱>

- ① 授業の途中で終わったが、この流れで、本時の目標は達成できるだろうか？ その理由は何か？
- ② ①での意見を前提に、改善すべき点を具体的に出し合おう。

教材理解の甘さ、児童の反応の予測の甘さ、本時の目標のとらえの甘さを痛感しました。

児童役感想

児童の立場から、「この授業で、本時の目標は本当に達成できるのか」を深く考えました。

- ◇ この後、事後研究会の協議を通して改善した学習指導案をもとに、残った数人で、再度、模擬授業を行ったそうです。
- ◇ このようにして、若い教員は力を付けていくのだということを実感しました。
- ◇ この1週間程あとの、研究授業と事後研究会があったのですが、模擬授業に参加した教員の意見は、児童の立場に立った内容の濃いものでした。

実践のポイント

「この授業で、本時の目標は本当に達成できるのか？」を児童の立場から考える習慣
タイマー、デジタルカメラ、ボイスレコーダーを使い慣れ、有効活用すること

タイプ

B

C

D



Q 7 事後研究会での協議が深まりません。何かよい方法は？

Point

事後研究会を深めるための様々な方法があります。方法の特色を理解し、効果的に活用することが大切です。

- ① 量的研究法・質的研究法や理論と仮説に基づき深めるなど様々な方法があります。
- ② 授業の記録を取ることが事後研究会を深めることにつながります。

1 事後研究を深める方法

授業研究は具体的事実をもとに授業を評価（解釈）し、みんなでアイデアを出し合い、よりよい授業を考えるために行います。授業には授業者や児童生徒の具体的な言動として直接分かる部分と授業者が児童生徒の反応に対してどのような判断をしたのかなど分からない部分があります。そのような一見しただけでは分かりにくい授業の特徴をとらえるために授業分析をします。

授業分析の方法には、個人の主観をできるだけ排除し、客観性・一般性を重視する量的研究法と、参観者が固有の文脈や環境を重視した観察を行い、各自の知識や経験をもとに児童生徒一人一人の学習の状況等に注目する質的研究法があります。

また、理論や仮説をもとに基準や視点をもって授業を見る方法や授業そのものから理論や仮説を引き出す方法などがあります。状況に応じて各研究法の長所を生かしながら実践に応用することが求められます。

2 授業記録の取り方

授業を分析して研究を深めるためには、事実に根ざすことが大切で、授業の記録をしっかりと取ることが、事後研究会を深めることにつながります。授業記録には、教員の授業展開や行動、子どもの活動や反応をカードやチェックシートに記述したり、ビデオカメラで映像を記録したりするなど様々な方法があります。

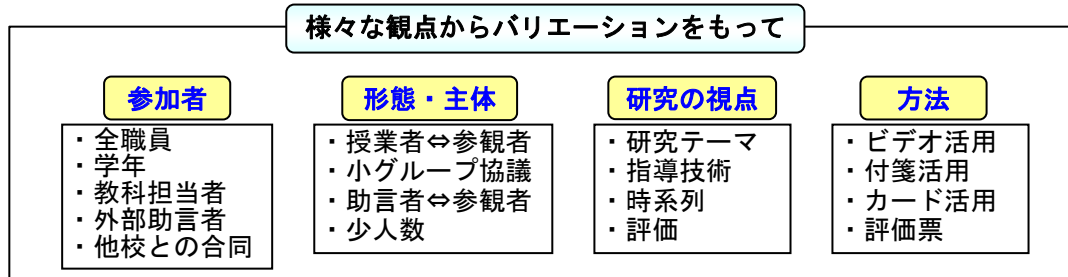
以下にあげるのは、よく使われる授業記録の方法です。

- ① 授業中に参観者が気付いたことを自由にメモを取る。
- ② 事前に用意された評価票等の項目に沿ってメモを取る。
- ③ 事前に着目する児童生徒やグループを決めて観察記録を取る。
- ④ 授業全体の授業者と児童生徒のすべての発言を記録する。
- ⑤ ビデオカメラで授業の映像を記録する。
- ⑥ 授業者が自分の実践を振り返って授業記録を書く。
- ⑦ 児童生徒のポートフォリオや学習カードの感想等を分析する。



授業研究を深めるために — 事後研究会の方法 —

事後研究会の計画にあたって



目的にあった効果的な事後研究会の実施

研究者による様々な方法

カンファレンス方式(稲垣忠彦)

同一学年同一教材に基づく授業を二つのビデオで記録する。

二つのビデオをグループで見て、気付く特徴を発言していく。

授業者は参加者から得られたコメントにより、自分が実践への知見をどのように広げることができたかを述べる。

ワークショップと

シンポジウムによる授業研究(村川雅弘)

授業で気付いたことを付箋に記入する。

授業者の解説を聞きながら付箋に気付いたことを記入する。

教科、評価、情報の三つのグループに分かれディスカッション(各自の付箋は関連する各グループに渡す)

(佐藤学)

話し合いの対象を「どう教えるべきだったのか」ではなく、「子どもがどこで学んでいたのか、どこでつまづいていたのか」の事実 zu 置く。話し合いにおいて参観者は授業者への助言ではなく、その授業を観察して自らが学んだことを述べ、その多様性を交流して学び合う。

カード構造化法(藤岡完治)

授業者がビデオで記録した自分の授業を見ながら、授業の中で考えたこと、気付いたことをカードに記入。それを構造化して第三者に説明する。

フリーカード法(水越敏行)

授業のビデオを見て気付いたことをフリーカードに記入。カードを整理、構造化する。

構造化の方法は、KJ法的なもの、時系列にプラス面、マイナス面を整理するものなど

授業リフレクション(澤本和子)

自己リフレクション: 自分一人で自分の授業を振り返る。

集団リフレクション: 仲間と共同で実施する。

対話リフレクション: 2・3人で対話しながらリフレクションを進める。

(木原俊行)

春と秋に同じ教師が研究授業を試み、その差異を議論する。

連続する2時間で二つの研究授業を実施し、カリキュラムの系統性等を評価する。

資料提供: 国立教育政策研究所総括研究官 千々布 敏弥 先生

本書に掲載している参考例

Q 8 事後研究会での意見が少なく、協議が深まらないのですが?

Q 9 授業研究を深めるにはどうすればよいですか?

Q 10 授業研究を深めるために外部の力をどのように活用すればよいでしょう?

実践のポイント

上記に紹介されている様々な研究の方法については、研究者の著書等を参考にしてください。

ヒントボックス

そのまま方法を真似するだけではなく、各学校の実態に合わせて、それぞれの学校らしさのある研究方法を創り上げていくことが大切です。授業研究は各学校の'文化'です。

タイプ

A

C



Q 8 事後研究会での意見が少なく、協議が深まらないのですが？

Point

- ① 協議が深まらない要因を考えましょう。やってよかったといえる事後研究会にしなければ、いくら回数が多くても授業改善の意欲にはつながりません。
- ② 事後研究会の実施方法に工夫を加え、協議が深まらない要因を取り除いていきましょう。
- ③ いくつかの方法を組み合わせ、粘り強く取り組みましょう。

1 こんな事後研究会はありませんか

まず、授業者から授業を終えてのコメント（これもうまういかなかった言い訳が多い）。次に、参観者からの感想や意見。しかし、挙手しての発言がないため、「それでは、順番に」ということになる。これも「お疲れ様でした」とねぎらいの言葉に始まり当たり障りのない感想が続く。そして、授業の課題や改善の方向性等も明確にならないまま時間切れとなる。

こんな事後研究会を何度繰り返していても、授業力の向上にはつながりません。やってよかったと言える事後研究会にするためには、発言が少ない理由を探る必要があるでしょう。

2 なぜ、発言が少ないのか

事後研究会で、協議が深まらない要因として次のようなことが考えられます。

- ◆ 授業研究のねらい、協議のテーマがはっきりせず、話し合いが深まらない。
- ◆ 授業者に遠慮があり、厳しい指摘がしにくい。
- ◆ ベテラン教員の発言した後では、若い教員が発言しにくい。
- ◆ 協議時間に比べて人数が多く、発言の機会が少ない。等々

3 新しい方法の導入を

このような事後研究会では、いくら回数を重ねても参加者の意欲は高まりません。

やはり、こうした硬直化した事後研究会には、新しい方法を導入することが必要でしょう。

次の実践例は、付箋を活用した授業研究の例です。二つの方法を紹介しましたが。その他の応用も可能です。

ただ1回だけの工夫では、活発な事後研究会は定着しません。様々な工夫を行い、粘り強く取り組んでいきましょう。



「付箋を使い、活性化をねらう」例 — 事後研での発言が増え、内容が深まる！ —

授業参観をしながら

付箋に下の①～③について書き、
学習指導案等にどんどん貼っていきます。

- ①参考になったこと（青）
- ②改善した方がよいと感じたこと（赤）
- ③質問（黄→A・Bともに黒板に貼る）



漠然と参観するのではなく、付箋という具体物に次々に記入していくことで、授業観察の意識が高まりました。

全体での協議の前に

二つの方法

A：付箋を一括整理する方法



まず、項目に分類して黒板等に貼ります。



話題にしたいことを選びます。

B：少人数で協議する方法

まず、付箋をもとに少人数で話し合います。



話し合った内容を文章にまとめます。

個人持ちのメモではなく、付箋に記入することで、全体で共有できる情報となりました。

個々の考えがより明確になり、次の全体協議の深まりにつながりました。

・全体の傾向が把握でき、メモの内容を取捨選択することで、話題の絞り込みができました。

全体協議

A…付箋をもとに司会者が協議を進めます。



B：グループでの話し合いを発表したりして協議を深めます。

協議の柱が明確になり、深まりのある全体協議ができました。

実践者の声

この方法をとることにより、次のような効果が得られました。

- ① 参観者の授業観察に対する意識の向上
- ② 個々の意見を大事にした協議
- ③ 効率的な協議と内容の深化
- ④ 課題と授業改善への方策の明確化

ヒントボックス

この実践は、付箋を活用していることで、次のような応用・発展が可能です。

- ◇ KJ法等を使い、情報の整理・分類や再構成をする。
- ◇ 全員の付箋を貼ったものを、以後の資料として活用する。

タイプ

C

D



Q 9 授業研究を深めるにはどうすればよいですか？

Point

授業研究会を何度もやっているが議論が深まらない、協議が焦点化しないといたことが見られます。以下の点を確認してみましょう。

- ① 研究テーマが学校の実態や課題に即しており、共通理解されているか。
- ② 参観の視点や評価の視点が具体的で明らかになっているか。

1 研究テーマを 共通理解する

どんな研究テーマを立てるかで、研究の深まりが大きく違ってきます。研究テーマの決定に当たっては、自校の「強み」「弱み」を考慮し、実態に即したテーマを設定することが大切です。テーマ見直しの観点としては、次のような点があげられます。

- ◇ そのテーマは学校にとってどんな意味があるのか。
- ◇ 児童生徒にどのような力を付けようとしているのか。
- ◇ その力は教科の学習の中でどのように育成されるのか。
- ◇ 具体的にどのような活動や行動として見ることができるのか。
- ◇ その力は、総合的な学習の時間や実生活でどのように現れ生かされるのか。

これらの観点で、ブレインストーミングやKJ法などの手法を使って話し合うことで、全員が主体的に参加しながら認識を深め、共通理解を図ることができます。

2 参観の視点が 具体的である

授業を参観するに当たっては、次のような視点についての共通理解を図ることが重要です。

- ◇ 参観者が授業を見る視点を明確にする。
- ◇ 授業者がどこを見て欲しいのかということを明確にする。
- ◇ 見る視点は抽象的なものではなく、児童生徒の言動や記述・作品など具体的に分かるものとする。

また、参観者に配付する学習指導案に「参観の評価票」を添付したり、児童生徒の座席表を付けたりすることで事後研究に結び付く参観をすることができます。

事後研究では、児童生徒の発言や学習活動、指導者の発問や指示など目に見える部分の協議から始め、指導者のねらいや思い、その時々判断などの直接に見えない部分について協議を進めることで、充実した事後研究会になります。

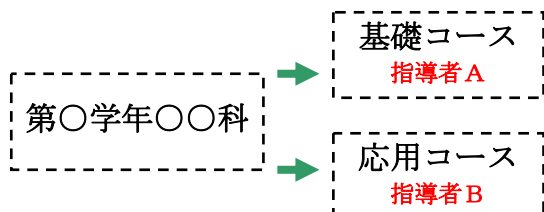


研究授業を深めるための実践例

－ 比較することで視点が焦点化 －

習熟の程度に応じた授業を比較する

習熟の程度に応じた少人数授業



同じ単元の同じ時間の授業を公開します。参観者は、二つの授業を行き来します。（ビデオを活用してもよい）

二つの授業を比べることで、習熟の程度や個に応じた授業展開になっているかどうかを考えることができました。

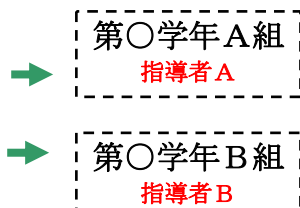
教員の声



同じ学習指導案を使って授業を比較する

小学校の例

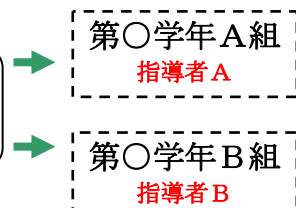
学年の教員が相談して、一つの学習指導案を作成



同じ学習指導案でも学級や児童が変われば授業の進み具合や深まり方が違ってきます。（比較は、教員の力量の優劣を付けるためではありません。）

中学校の例

教科担当一人で、一つの学習指導案を作成



中学校では、通常、同じ授業を数学級で実施していますが、学級が異なることによって、生徒の発言一つ、指導者の対応一つで深まりが大きく違ってきます。

教員の声



（授業を公開した教職2年目の小学校教員）

- ◆ ベテランの先生と二人で教材研究や授業展開について相談し勉強になった。
- ◆ 指示や発問、板書まで同じように決めていたのにこんなに違うのは・・・？
- ◆ 児童の発言に対する「はたらきかけ」が違うみたい。ベテランの先生は、私の予想していなかった反応に対してうまく「はたらきかけ」をし、他の児童の発言を引き出していた。
- ◆ 児童の様々な反応に対して、いろんな「はたらきかけ」の仕方があることが分かった。

実践のポイント

同じ学習指導案の二つの授業参観を通して、児童生徒の様々な反応に対して、どのような「はたらきかけ」が有効かを参加者全員で話し合うことができます。様々な「はたらきかけ」は次の授業につながります。

ヒントボックス

同じ学習指導案ではなく、同じ教材を用いて、二人の教員がそれぞれ独自の指導案で授業を行い、その比較を通して授業研究を深める方法もあります。

タイプ

A

B

C

D



Q10 授業研究を深めるために外部の力をどのように活用すればよいでしょう？

Point

学校外の力を活用することで、新たな視点や方法を取り入れ、更に校内研修を活性化することができます。

- ① 校内研修と学校外の研修や研究との連携を図ります。
- ② 校内研修で学校外の人材を招聘します。

1 学校外の研修や研究と連携

教育委員会が実施する研修や公的な研究会の取組など、学校の外では様々な研修や研究が行われています。研修や研究の内容が、参加した教員だけにとどまるのではなく、全教員の研修や実践に役立つように資料や情報を提供するとともに校内研修で伝達するような設定が必要です。

特に、長期間行われる初任者研修等は、校内研修を活性化させるよい機会になります。初任者教員が多くの先輩教員の授業を参観したり、何回も授業を公開し多くの教員からアドバイスを受けたりとするというような関係の中で、初任者が成長すると同時に校内において授業についての意見交流がしやすい雰囲気生まれます。できるだけ多くの教員が指導にかかわることで学校の雰囲気が変わります。

他に、研究指定校の研究発表や先進校視察、小中連携など近隣の学校との共同研究なども大きな刺激になります。また、時には研究成果を外に発信し、多くの意見や感想をもらうことも研究の形骸化を防ぐ上で重要です。

2 学校外の人材を活用

自校の教職員だけで行う研究は、時には新鮮味がなくなりマンネリ化する恐れがあります。大学の研究者など外部講師を招き、講演だけでなく事後研究会などで専門的な立場からの指導を受けることで研究がより確かなものになります。

外部講師は、大学の研究者の他に、研究指定校の管理職や研究主任、また、授業について素晴らしい実践を行っている地域のリーダー的な教員や指導者養成の研修を修了した教員からも新しい視点や客観的な意見を得ることができます。一度ではなく期間において数回招聘することで、当事者には分からない研究の進み具合や成果についての意見を得ることができます。外部人材の情報をたくさんもち、研究のネットワークをつくることも重要です。

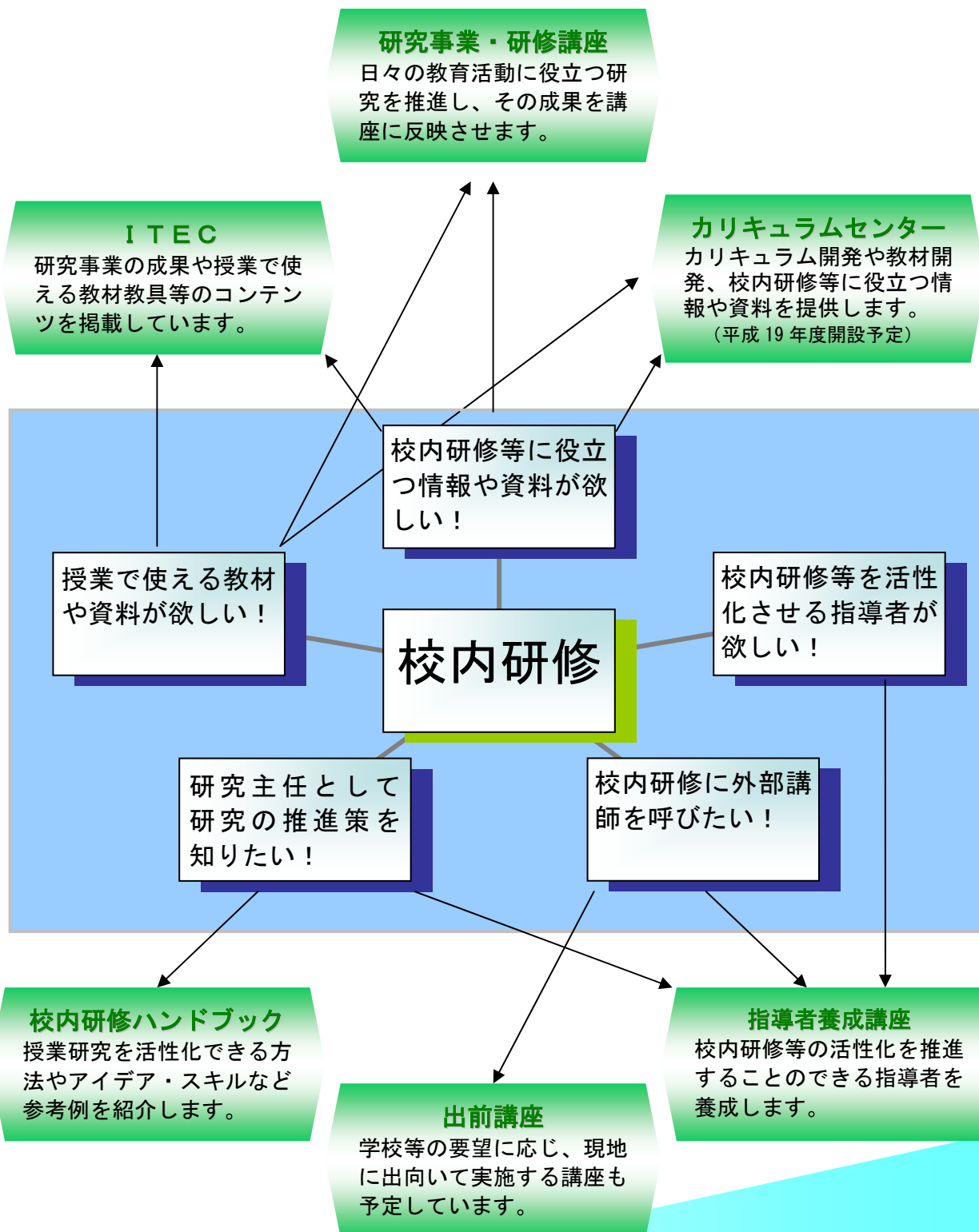
また、児童生徒の授業アンケートや保護者参観の感想アンケートも参考資料の一つになります。

学校を支援する総合教育センター

－ 校内研修の活性化 －



校内研修に生かせる研修講座や様々な事業を行っています。



タイプ

A

B

C

D



Q11 教員の意識を高めるにはどうすればよいですか？

Point

授業研究の活性化には、教員の意識が大きく影響します。次の点で取組を見直してみましょう。

- ① 研究主題が、教員一人一人の課題意識と結び付いているか。
- ② 全教員が積極的にかかわれる場が設定されているか。

1 研究主題と教員の実践課題をつなぐ

授業研究の研究主題は、一般的に児童生徒の実態把握をもとに設定されたり、研究指定校の場合は今日的な課題であったりしますが、その研究主題が個々の教員の課題や悩みと結び付いていることが、意欲をもって取り組む上で大切です。同じ研究主題でも、ベテラン教員の「私にとって」、中堅教員の「私にとって」、初任者の「私にとって」というように、一人一人の授業実践における具体的な目標を掲げて研究や実践をすることが、最終的に学校としての研究主題を追究することになります。また、研究主題について、個々の教員の想いを交流する機会を設けることが意識を高めることにつながります。

2 全教員が積極的にかかわれる工夫

授業研究において、研究主任や教科主任など一部の者が頑張っていて、他の多くの教員が受身的になっているケースがあります。研究を進めるに当たって、個々の教員が得意分野や個性を生かして何らかの役割と責任がもてるような組織・計画をつくることで、全員が参加、協力しながら主体的に意欲的に取り組むことができます。「一人一役」になるのが理想です。

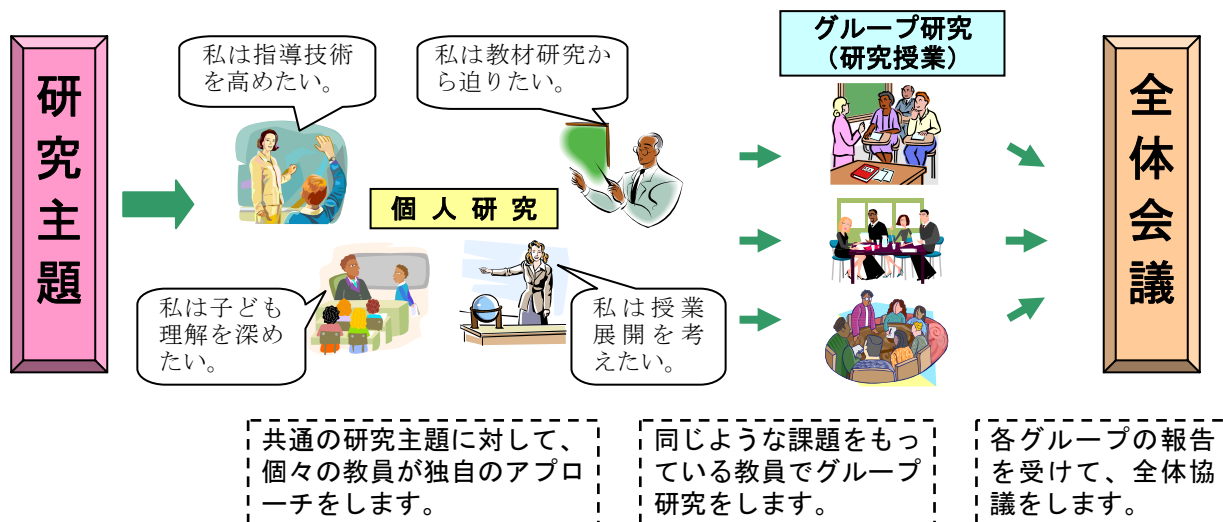
また、研究組織を小グループに分けて、各グループで研究授業や事後研究を行うとともに、小グループで独自のサブテーマや研究仮説を設定したり、各グループが「研究成果の調査」や「先行研究の調査」などの役割を担当したりすることで、全教員が積極的に研究にかかわることができます。

さらに、研究会の協議が一部の教員の発言で進行するのではなく、みんなが発言できる、参加できるような協議の方法を取り入れることが大切です。事後研究会も授業者の自評・参観者の感想・指導助言という、これまで慣習的に行われていたパターンを見直してみてもよいでしょう。



教員の意識を高める取組 － 全員が積極的に参加できる工夫 －

研究主題を一人一人の目標に



コーチングによるモチベーションアップ

GROWモデル……GROWとは「成長する、はぐくむ」という意味があります。

GOAL (目標の明確化)	・実現したい具体的な目標を設定します。 「実現したいことは何ですか？」
REALITY (現実把握)	・現状の把握と目標の実現にとっての課題を把握します。 「今、どのような状況ですか？」
RESOURCE (資源の発見)	・目標達成のために必要なことや活用できるものを確認します。 「実現のために必要なことは何でしょうか？」
OPTIONS (選択肢の創造)	・目標達成への方法を選択します。 「どのような方法で実践しますか？」
WILL (目標達成の意志)	・目標達成への意志を確認します。 「いつから実行に移しますか？」

※1

Q7の参考例「事後研究会の方法」より

(佐藤学)

話し合いの対象を「どう教えるべきだったのか」ではなく、「子どもがどこで学んでいたのか、どこでつまづいていたのか」の事実に着く。話し合いにおいて参観者は授業者への助言ではなく、その授業を観察して自らが学んだことを述べ、その多様性を交流して学び合う。

※2

ワークショップとシンポジウムによる授業研究(村川雅弘)

授業で気付いたことを付箋に記入する。
授業者の解説を聞きながら付箋に気付いたことを記入する。
教科、評価、情報の三つのグループに分かれディスカッション(各自の付箋は関連する各グループに渡す)

※3

実践のポイント

コーチングとは、相手の能力を引き出しながら自発的な行動を促すコミュニケーションスキルです。
最も基本となるスキルは、「傾聴」「承認」「質問」です。

ヒントボックス

独立行政法人教員研修センターのホームページから「学校におけるコーチング」研修教材をダウンロードすることができます。



Q12 授業研究についての共通理解を図るためにどうすればよいでしょう？

Point

授業研究を始めるに当たって、教員の考えや想いをすり合わせておくことで、「同じ土俵」に立って研究を深めることができます。

- ① 授業研究の意義についての共通理解
- ② 学習観等についての共通理解
- ③ 授業を見る視点や事後研究の持ち方等についての共通理解

1 授業研究の意義についての共通理解

学校の研究主任の悩みの一つが、授業研究が活性化しないということです。教員にやる気がないというのではなく、校内研修の意義が十分に理解されていない、授業研究の必要性が理解されずに、みんなで創っていくという意識が弱いということが考えられます。

授業研究の意義についての共通理解は、授業研究を推進する上で最も重要な作業です。各教員が授業研究の意義を理解することで、積極的に研究授業を行ったり、参観したりするなど、研究会を活性化することができます。

学校は、様々な経験や実践課題をもった教員により構成されています。様々な考えや想いを交流し理解し合うことで、その後の授業研究は有意義なものになります。

2 学習観等についての共通理解

「よい授業」とは、どのような授業なのでしょう。どのような授業がよい授業で、自分はどのような授業をしたいのか、目指しているのかは、教員によって様々なイメージがあると思います。様々な学習理論があり、学習観の違いによって、授業観も違ってきます。また、児童生徒の主体性を基に展開する「問題解決的」な授業もあれば、基礎基本を徹底させるための「反復的」な授業もあります。各教員の想いを交流し共通理解する作業自体も意味のある研修になります。

3 授業を見る視点等についての共通理解

授業を参観する時に、「授業を見る視点」が共通理解されることで、事後研究会の中心課題が明確になり、協議が意味のあるものになります。「授業を見る視点」は、授業研究のねらいや研究主題によって決まってきます。その際に、前述した「よい授業」についての共通理解の作業が生きてきます。



授業研究のための共通理解

－ 共通理解の方法 －

「よい授業」についての共通理解を図る

○小・中学校授業実践指導者養成特別講座における演習で、「よい授業」について検討しました。

《手順》

①ブレインストーミング
一人一人が「よい授業」の要素だと思うことを付箋にできるだけたくさん書き出す。

②KJ法
グループで話し合いながら、付箋を模造紙の上で分類し、かたまりごとにタイトルを付け整理する。

③ポスターセッション
できあがった模造紙を壁に貼り、それぞれのグループが他グループに説明する。

◇各グループに、模造紙・付箋・マーカーなどを配付します。
◇図中の矢印は、かたまりごとの関係性を表します。

《グループA》



《グループB》



《グループC》



本書に掲載している参考例

共通理解を図るためには、何よりもまず話し合うことが大切です。しかし、話し合いのための話し合いではなく、少し目先を変えた素材を用意し、それについて協議することを通して自然に共通理解が図れるというのが理想ではないでしょうか。

Q7の参考例 ※1

フリーカード法(水越敏行)
授業のビデオを見て気付いたことをフリーカードに記入。カードを整理、構造化する。
構造化の方法は、KJ法的なもの、時系列にプラス面、マイナス面を整理するものなど

Q14の参考例

授業研究をスタートさせるために
－授業研究のルールー
－歩踏み出せば見えてくる
共に学び合える授業研究に

実践のポイント

ブレインストーミングは、「質より量」です。できるだけたくさんのアイデアを出します。他の人のアイデアを否定してはいけません。また、KJ法では、分類したかたまりごとの関係性を考えることが大切になります。

ヒントボックス

この方法は、「よい授業」だけでなく、参観の視点を考えたり、研究主題を決めたりするときにも活用できます。

タイプ

A

B



Q13 みんなで授業を見合う雰囲気をつくるよい方法は？

Point

事前準備の時間が取れない、授業の批判をされたくないなどの理由で授業を見合う雰囲気がない学校では、次のような方法が考えられます。

- ① 全員が一斉に授業を見合う期間を設定する。
- ② 授業を見合ってよかったと思える方法を考える。

1 全員が一斉に授業を見合う

日頃から気楽に授業を見合う雰囲気があまりない学校では、学期に一度の公開授業週間を設定してはどうでしょうか。公開授業週間は、全員が必ず1回、授業を公開します。中学校では授業を担当しない時間がありますので、その時間に参観します。時間割を変更することなく、生徒を早く下校させたり、自習にしたりしないで実施することができます。

この方法では、それぞれの公開した授業についての事後研究会を設定することが困難ですが、参観した者が授業者に感想などを含めたアンケートを手渡したり、学年会議や教科会議で意見を交流したりするなどの方法が考えられます。

また、公開授業週間を保護者や地域の人に対する授業参観と重ねることで、学校の取組を理解してもらう機会にもなります。

2 見合ってよかったと思える方法

研究授業ではきちっと練り上げた学習指導案を作成する必要があります。また、学習指導案を作成することも授業力を向上させる上で重要ですが、みんなで見合う雰囲気をつくるというねらいで行う公開授業週間では、以下の点に絞った授業メモを配付してはどうでしょうか。

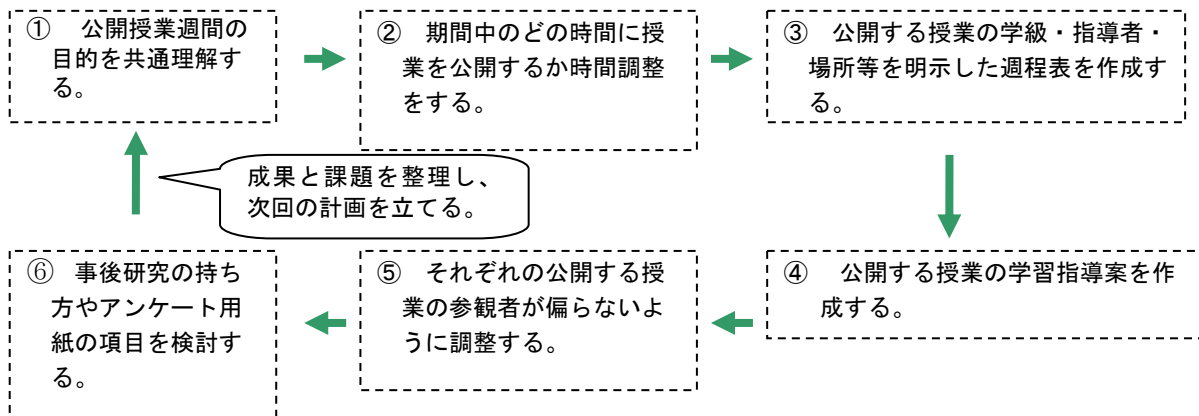
- ① 授業者がどのような課題をもっているのか
- ② 公開する授業ではどのような点を見て欲しいのか
- ③ どのような視点でのアドバイスを求めているのか

この取組は、日頃の悩みや困難な状況をさらけ出し、互いにアドバイスをし合い、本音で同僚と語り合える関係や雰囲気をつくることをねらいとして実施します。まず、一人一人の教員が授業を見合うことのよさを理解することが大切です。



全員が授業を公開する例 — 学期に1度の公開授業週間を設定する —

公開授業週間の計画の立て方の例



「アドバイス交換メモ」の例

- ① 右の用紙に、「本時の展開の概略」と「工夫点や見所」等のポイントを記入して印刷します。
- ② ①のプリントを、参観者に事前配付します。
- ③ 参観者は、「参観後の意見」の欄に感想やアドバイスを書いて授業者に渡します。

〇〇科授業メモ		月 日 ()	校時	年 組	授業者 ()	参観者 ()
本時の展開	本時のポイント	参観者の意見				
導入	○授業者の課題					
展開	○工夫点や見所					
まとめ	○欲しいアドバイスの視点					

生徒の発言をうまく引き出せない、私語が多いなどの授業者の課題を書く。

工夫点や見所の箇所を太字や枠囲みなどで強調する。

授業者の求めているアドバイスに応える感想や意見を書く。

教員の声



若い教員：実践課題を踏まえて工夫したことが効果的であったか、他に方法がないかなど、本当に教えてほしいと思っていたことについての意見を聞くことができた。

研究主任：授業を見合い、授業について話し合う雰囲気が生まれてきたので、次回は、事前研究会で学習指導案もしっかり検討しながら授業研究を推進していきたい。

実践のポイント

まずは、気楽にみんなが授業を見合う雰囲気をつくるのが大切ですが、最終的には、共通の研究主題を設定し、教育課題の解決を目指した授業研究を計画的・継続的に推進できることが重要です。

ヒントボックス

公開授業週間を保護者や地域の人への参観と重ね合わせ、教員とは別の視点での感想や意見を聞くことも、授業を考える上で参考になります。



Q14 まずは、授業研究をスタートさせたいのですが・・・。

Point

授業を見合う雰囲気生まれなくて、授業研究が魅力のあるものにならないという研究主任の悩みを聞きます。

魅力ある授業研究には、次のような要件が望まれます。

- ① 研修と実践を通して、全教員が共に学び合い成長しているという実感がもてる。
- ② 研修の成果として、児童生徒の成長が見える。

1 共に学び合い 成長できる研修

本来、校内研修や授業研究は教員にとって必要であるだけでなく、楽しくやりがいのあるものだと思います。校内研修が魅力あるものになっていないというのは、職場の雰囲気や同僚間の人間関係も影響していると思われます。

校内研修は、全教員が共通の目標に向かって研修を進めます。全教員が一堂に会して行うだけではなく、職員室等で日常的に意見や情報を交換することも大切な研修になります。そのような環境の中で、共に学び合い、共に成長していくことができます。

「協働性」とは、同じ目的のために協力して働くこと、「同僚性」とは、各自の専門性や個性を基盤にし、お互いに批判し合いながら高め合うことです。魅力ある校内研修を進める中で、「協働性」や「同僚性」を培っていくことが求められます。自分一人では気付かなかったことが、同僚の指摘で気付いたり、ヒントになったりします。教員が一丸になり、学校の課題解決のために切磋琢磨しながら取り組むことで魅力のある校内研修、魅力のある学校になっていきます。

2 児童生徒の成長 が見える研修

校内研修を計画・実施するに当たり、研修内容と学校の教育課題、また、個々の教員の実践課題とに関連があることが大切です。関連を理解できれば、研修内容を日々の実践で継続的に生かすように取り組むこともできます。その取組過程において、研修の成果として児童生徒の成長・変容を見いだすことによって、教員としての力量が向上したという実感をもつことができます。

このように、児童生徒の成長を確認しながら進められることが校内研修の特色であり、その過程に教員としての喜びがあります。校内研修が魅力あるものとして継続していく上で、児童生徒の成長が見えることは重要なことです。



授業研究をスタートさせるために — 授業研究会のルール —

A 小学校「授業研究会のルール」例

・授業を見合い、協議したい。
・児童生徒理解や教材、指導法について研修したい。
・授業についてのアドバイスが欲しい。

話し合い

・忙しくて時間がない。
・本音で話し合える雰囲気がない。
・授業研究の意義が理解されない。

- ◎ 年間一人最低1回は授業を公開する。
- ◎ 特別な授業ではなく、いつもの授業を公開する。
- ◎ 学習指導案は略案でもよい。(活性化すれば、学習指導案を充実して)
- ◎ 事後研究会では、社交辞令の感想は言わない。
- ◎ 授業者の課題だけを論じないで、自分自身に引き寄せて発言する。

※1

一歩踏み出せば見えてくる

まず、取りあえず始めてみる、スタートすることが大切です。気負い無く、あらたまることなく、いつもの授業をお互いに見合うことから始める、そのための「授業研究会のルール」です。

各学校においてこのようなルールを作り、まず、授業研究を始めてみるのが大切です。実際にやってみることで、いろいろなことが見えてきます。そして、次のステップに進むための課題や方法も見えてきます。



共に学び合える授業研究に

日常の授業を公開することで、準備のための負担を軽減することができます。また、授業を公開した教員だけが「まな板の鯉」になるのではなく、お互いに意見やアイデアを出し合い、課題や成果を共有することで、みんなが共に学び合える授業研究会になります。そのためのルールを作り実践することが、授業研究会を活性化させ、同僚性を高めることにつながります。

実践のポイント

スタートがなかなか切れないというのが最初の山です。日常的に授業研究を行える状況になれば、学習指導案を充実させるなど研究の深化を目指し、次のステップに挑戦です。

ヒントボックス

授業研究が行われにくい理由や学び合える研究会の持ち方について、全員で話し合い、整理することで、各学校独自の「授業研究会のルール」を作ることができます。

タイプ

A

B



Q15 授業を公開する際の指導案作成に時間がかかります。何か簡単な方法は？

Point

- ① まずは日常的に授業を見合うことから始める。
- ② 授業を公開する目的や学校の状況に応じて柔軟に対応する。
- ③ 校内研修の活性化を進めつつ、あくまでも「中身の濃い授業研究」を目指す。

1 授業を見合うことから始める

すべての教員の日々の授業を改善していくには、お互いに授業を見合い、忌憚のない意見を交わすことが重要です。しかし、まだまだお互いに授業を見合うことがスムーズにいかない学校では、抵抗感をなくす工夫も必要になります。

また、教員相互の授業の公開が活発になればなるほどおのずと授業の公開の回数が増えることになります。授業参観が増えれば増えるほど、その目的に応じた方法を工夫して省力化と効率化を図ることも必要となるでしょう。

2 授業を公開する目的や学校の状況に応じて柔軟に対応

中身の濃い充実した授業研究を行うには、授業者がしっかりと練り上げた学習指導案を作成することが基本です。しかし、どの授業の公開も一律に考えるのではなく、その目的や学校の状況に応じて柔軟に対応することも大切です。

次にあげる例は、授業を公開することに対する抵抗感をなくし、徐々に活発な授業研究につなげていこうとする取組例です。

例1「毎月10日は『じゅう(10)参観』の日」

生徒指導上の課題が多く、授業の公開が年に数回しかなかったA中学校。お互いの授業を公開し合うことからスタートした例

例2「参観者が記入する指導案」

研究授業というと、授業者が指導案を作成し参観者に配付するのが基本ですが、逆転の発想で授業研究をしました。

例3「ミニ指導案を使って」

本当は、個人の授業準備のために工夫されたミニ指導案を簡単な授業研究に使ってみました。

3 目指すは中身の濃い授業研究

授業の公開を活発にするための取組例をあげましたが、目指すべきは「中身の濃い授業研究」であることは、言うまでもありません。ですから、ここにあげている例は、あくまでも、そこに至るまでのプロセスであり、きっかけづくりであると言えます。一つの方法に固執することなく、様々なアイデアを取り入れながら、校内研修の活性化を進めていきたいものです。



教員相互の授業の公開を活発に － 互いの授業を見る機会を増やすことから －

例1 「毎月10日は『じゅう(10)参観』の日」

① 生徒指導に追われる学校でしたが、「まず、お互いの授業を見合おう」との校長先生の呼びかけからスタートしました。

② 全教員の授業公開日を年間に振り分けました。(詳細は各学期はじめに調整)
③ 事前に参観者の有無を確認し、調整します。

④ 授業者が、可能な範囲で指導案を用意します。
⑤ 参観者は、参観後のコメントを書いて授業者に渡すようにしました。

教員の声



- ◇ これまでは、まずは生徒指導で落ち着いた学校にしてからと考えていましたが、教師はやはり授業で勝負だと再認識しました。
- ◇ 「じゅう参観」がはじまってから、職員室の会話に授業に関する内容が増えました。
- ◇ これまで知らなかった生徒の別の一面を見ることができました。

例2 「参観者が記入する指導案」

① きっかけは、コンピュータの故障で、用意していた指導案のデータが打ち出せないということでした。苦肉の策で、参観者が記録代わりに、空欄になった指導案の枠にメモすることにしました。

② 事後研究は、個々がメモした「本時の目標」の交流からスタートしました。受け取り方の違いに、「いったい目標は何だったのか」と協議が深まりました。

③ 以後、時々この方法で授業研究をしました。

授業者からは、「気楽に授業提供できる」と好評です。また、参観者も、「授業者のはたらきかけと児童の反応の関係や、授業の流れについて、これまで以上に意識して参観できる。」との声があります。

授業者が作成した学習指導案が提示されると、参観者のメモとの比較によって一層協議が深まりました。

例3 「ミニ指導案を使って」

本校では、毎学期1回ある研究授業には十分に検討した学習指導案を用意し、充実した授業研究会を実施しています。しかし、日頃からお互いの授業を見合うようにしており、そんな時には、「ミニ指導案」を利用しています。

これだと、気楽に授業を参観してもらうことができ、いただいた意見を参考にして日々の授業改善ができます。こうしてお互いに授業を見合い、意見交換していることの積み重ねが、研究授業をする際の指導案作成に役立っています。

ミニ指導案とは

日々の教材研究のために、毎時間の指導計画を立てるためのものです。

教科書を縮小コピーしてノートに貼り、空欄に「本時の目標」や「授業の流れ」「予想される児童のつまずき」「指導の手立て」等を書き込みます。

※1 ※2

実践のポイント

「中身の濃い授業研究」をしようとすると、やはり、授業改善の視点も明確にした十分に練られた指導案が必要でしょう。上記の例は、正規の研究授業と組み合わせて実施するのが効果的でしょう。要は、授業を公開することに抵抗感をなくしていくことが大切です。



Q16 効率的に授業研究会を行うにはどのような計画がよいですか？

Point

時間調整ができないという理由から、授業研究を行いにくいという声があります。だからこそ実施可能な方法と年間を見通した計画が重要です。

- ① 少人数グループと全体の研究会を組み合わせで計画します。
- ② 授業研究を日常の実践や研究と結び付け、効率的に運営します。

1 少人数と全体会を組み合わせで計画

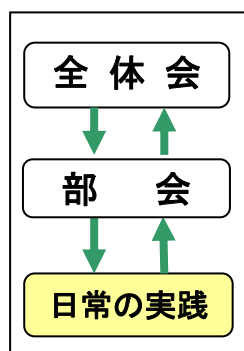
生徒指導に追われて時間がない、出張等で全員そろわないなど様々な理由で校内研修の時間を調整できないという声を聞きます。また、授業研究会を全教職員で行うためには、研究授業を公開する学級以外の児童生徒の対応も考える必要があり、月1回の研究会を計画するのが困難な状況も見られます。仮に、全教員が一堂に会しても全員が発言し、協議を深めるには多くの時間が必要になります。

そこで、授業研究会の回数を確保するために、学年や教科、同じ研究テーマなどの少人数の部会ごとに実施します。少人数の場合は、実施のための時間調整も容易にでき、また、事後研究会でも一人一人の発言の機会が増え、内容を深めることができます。そして、全教員で行う研究会では、各部会で実施した成果や課題を交流することを中心に運営します。少人数の研究会は課業期間、全体での研究会は長期休業中に配置した年間計画を作成することで時間調整が可能になります。

2 日常の実践と結び付ける

授業研究のための時間を生み出すために、校務を効率的に進めるための組織の見直しや内容の精選を図る工夫も大切です。

しかし、授業研究会の回数が多く取れなくても、授業はすべての教員が毎日行っています。毎日行っている授業と授業研究の中身を結び付けることで、授業研究を深めることができます。



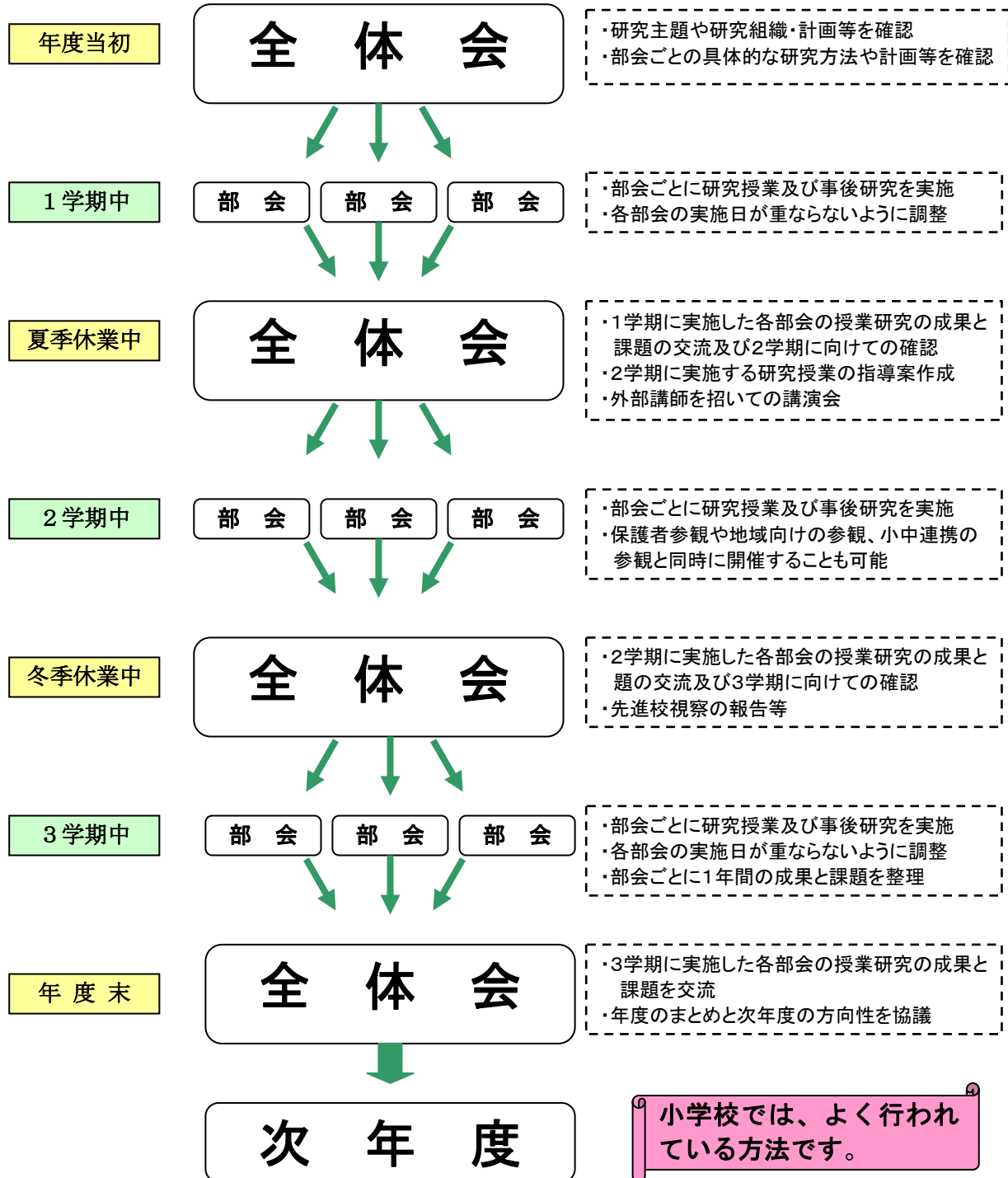
例えば、部会で行った研究会で課題が焦点化されたとします。その課題の解決のために、日常の授業を意識して工夫します。その授業を部会のメンバーが参観し、意見を交流します。

このような取組は、わざわざ時間や場所を設定しなくても職員室で日常的に行えます。そして、各自が日々の授業実践にすぐに反映させることができ、授業改善につながります。

ちょっとした工夫で、特別な準備を必要とする全体会と比較的頻繁に実施できる部会、そして日常の実践とを効率的に組み合わせることが可能になります。



無理なく研究会を実施する — 授業研究会の年間計画例 —



実践のポイント

PDCAサイクルで、学期ごとに成果と課題を点検し、改善策を打ち出すことが大切です。打ち出した改善策が有効であったかどうかを検証し、次の研究会へと継続していきます。

ヒントボックス

部会ごとに授業研究を実施するだけではなく、学習の基盤づくり、学習環境の整備、先行研究の調査などの役割を分担し全体会で交流することで、更に研究を深めることができます。

タイプ

A

B

C

D



Q17 授業研究が単発に終わります。継続性をもたせるには？

Point

授業研究がその場限りで終わってしまわないために、次のような取組が有効です。

- ① 毎回の研究が関連し発展するように具体的な推進計画を作成する。
- ② 授業研究の記録をきちんと残し、いつでも活用できるようにする。
- ③ 外部の風を取り入れる。（Q10を参照）

1 具体的な推進計画の作成

P D C A のマネジメント・サイクルを活用します。

PLAN (計画)

- ・学校の現状等を把握し、研究主題を設定する。
- ・研究を進める組織や計画を決定する。
- ・具体的な研究方法や評価の視点を決める。

ACTION (改善)

- ・成果と課題を受けて、次回の授業研究や日常の授業実践に生かす。
- ・研究主題や研究方法を検討する。

DO (実行)

- ・学習指導案を作成する。
- ・授業記録、分析等の準備をする。
- ・研究授業を実施する。

CHECK (評価)

- ・事後研究会を実施する。
- ・児童生徒の学習状況や変容を分析・診断する。
- ・研究の成果と課題を明確にする。

具体的な推進計画を作成し、毎回の授業研究が計画に沿ったものになるように実施することが大切です。また、研究主任は研究の成果と課題を「研究だより」などで発信することで、全教員の共通理解を図りながら研究に継続性をもたせることができます。

2 記録を活用できるように保存

せっかくの研究授業も済めば終わりではなく、できるかぎり詳細な研究記録を残し、その後の授業研究や日常の授業実践に活用できるようにすることも重要です。研究記録で成果や課題を確認することで、研究や実践に継続性と発展性をもたせることができます。記録がどこにあるのか分からない、取り出すのに時間がかかるようでは活用することができません。すぐに使える、みんなが使える、数年後の教員も使える状態に保存することが必要です。また、保存作業は、手間暇かけずに簡単にできる方法でないと長続きしません。きちんと保存された研究記録や実践記録は、その学校の財産になります。



研究に継続性をもたせる取組 － 実践資料ファイリングの工夫 －

封筒で整理する

◆ 手間がかからず、後で活用しやすい保存方法です。

1枚の封筒に1回分の研究授業
学習指導案、教材・教具、ワー
クシート、事前研究・事後研究
の記録などすべてを入れる。

封筒にインデックス
学年・教科や単元が分か
るように色付きの紙ラベ
ルを貼る。

棚に整理して保存
封筒を学年・教科ごと
に並べて保管する。



保存のルールを確認
授業を担当した人が保存
する。日常の授業で残し
たいものも保存する。

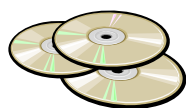


情報機器を活用して整理する

◆ 場所がいらず、手軽にファイルを活用できる保存方法です。

コンピュータの共有サーバーに保存

- ・ 校内のコンピュータを校内LANで結びます。
- ・ 各自が作成した学習指導案等の授業研究に関するファイルを共有サーバーに蓄積します。
- ・ いつでも誰でもこれらのファイルを手軽に取り出し活用できます。



CDやDVDとして保存

- ・ ビデオカメラやデジタルカメラで撮影した授業の様子を保存します。
- ・ デジタルファイルでない資料は、スキャナーで読み込みます。

※ 一般に職務上作成する著作物の著作権者は法人となりますが、詳細は著作権法を参照

実践のポイント

保存すること自体が目的ではなく、保存した資料が活用しやすい状態になっていることが重要です。
フラッシュカードやマグネットで黒板に貼るカードなども封筒式で保存しておくくと便利です。

ヒントボックス

DVDは、テープのように巻き戻す必要がなく、各場面の頭出しも瞬時に行えるという利点があります。
事後研究会でも有効に活用できます。



Q18 研究授業が多くなると、自習の時間が増えますが、何かよい方法は？

Point

- ① 授業研究のために自習が増え過ぎては本末転倒です。
- ② 短時間の授業参観や授業ビデオの活用で自習が減らせます。
- ③ すべての研究授業を一律にとらえず、様々なパターンを模索してはどうでしょう。

1 教室を空ける
ことが多くなっ
て困る

授業力を高め授業改善を進めるためには、研究授業を行い充実した事後研究会をすることが大切です。しかし、研究授業が活発に行われるようになると、「教室を空けることが多くなり困る」という声もよく聞きます。確かにその通りで、授業参観の度に自習にしていたのでは、本末転倒ということになりかねません。

一言に研究授業といっても、重点研究の研究授業もあれば、学年単位、ブロック単位の研究授業もあります。すべてを一律に考えず、その趣旨に応じて実施方法を選択することが大切です。

2 こんな方法が

次にあげる例は、あまり教室を空けることなく、授業研究を行っている取組です。

例1 「ここを見てほしい！ 15 分間授業参観」
45 分間の授業（小学校）時間の内、焦点を絞って短時間参観してもらおうというのがこの取組例です。

例2 「授業ビデオを見ながら事後研究」
授業時間の参観が困難な場合に、授業時間外にビデオを視聴しながら事後研究会を行うという取組例です。

3 参観の機会を
増やし、授業の
腕を磨く

年間一人一回の研究授業となると、大規模校では、年間何十回も自習ということになります。しかし、中心となる研究授業は全員がしっかりと参観する必要があります。

そこで、上の例などを活用しながら、それぞれの研究授業の趣旨に応じて実施方法を選択することが大切です。

要は、主体的・積極的に授業を参観し合って授業の腕を上げていくことなのです。



研究授業の参観に伴う自習を 少なくする例

例1 「ここを見てほしい！ 15 分間授業参観」

- ① 右の用紙に、「授業の展開の概略」と「見てほしいポイント」を記入して印刷します。
- ② ①のプリントを、参観者に事前配付します。
- ③ 参観者は、参観後の意見を書いて授業者に渡します。
事後研究会は実施しません。

ここを見てほしい！ 15 分間授業参観	
授業展開	ここを見て、ご意見ください。
導入	＜例＞ ☆子ども達が考えを語りあった後、それをまとめて「今日は、こんなことを勉強した」とはっきりさせられるような「まとめ」をめざしています。 ☆本時の授業では、……という点を工夫してみました。ご意見をください。
展開	
まとめ	
時 分～時 分	
参観者の意見	お名前【 】

参観して
ほしい部
分を太枠
で囲む

予定時間
を記入

「見てほしいポイント」や「提起したい事項」等を記入

参観者が記入
して授業者へ

教員の声



- ◇ 短時間の授業参観でも、参観の視点さえしっかりしていれば、立派な授業研究になることが分かりました。
- ◇ 他の先生に授業を見ていただくことを遠慮していましたが、この方法だと気軽にお願ひでき、的確なアドバイスがもらえます。

例2 「授業ビデオを見ながら事後研究」

- ① ビデオは授業者自身が固定で撮影します。
- ② 事後研究会の会場は、授業を行った教室（板書はそのままだしおきま）教室のTVでビデオを再生して視聴します。
- ③ 会議の時間に合わせて、授業ビデオの導入部分を見たり、練り合いの場面を見たり、あるいは早送りで見ると、いろいろな活用の仕方ができてとても有効です。

教員の声



- ◇ まだ、子どもたちの温もりが残った教室で、板書を見たりビデオを見たりすることで、授業のムードは十分伝わってきました。
- ◇ ポイントとなる発問や児童の発言などを繰り返し再生できるので、授業研究にはとても効果的だと思いました。

実践のポイント

これらの実践は、方法が先にあったというよりは、「授業を見てもらいたい」とか「授業研究がしたい」という願いが先だったと思います。願いがあれば、方法はいくらでもあるということです。

例1のプリントは、学習指導案と一緒に参観者に渡すことで、一層効果的な授業研究にすることができます。

ヒントボックス

なま
生の授業を参観した場合の事後研究会であっても、ビデオを用意しておく、授業場面が再現できて効果的なことがよくあります。

タイプ

A

B

C

D



Q19 教員数が少なく、校内研修がマンネリ化しがちなのですが？

Point

- ① 小規模校のメリットを最大限に生かす。
- ② 近隣校との連携・協力や、小中連携の視点を取り入れる。
- ③ 外部の人材を活性化に役立てる。

1 小規模校のメリット

小規模校には、校内研修をより活発で効果的なものにする上でのメリットがたくさんあります。それらは、中規模校・大規模校でも大いに参考にすべき点です。

- ◇ 教員数が少ないため
 - ・ 短時間の研修会がもちやすい。
 - ・ 全員が発言でき主体的に参加できる。
 - ・ 協議が深まりやすく、すぐに実践に反映できる。
 - ・ 授業の公開がやりやすく、全員の授業を相互に見合える。 等

2 小規模校のデメリット

一方、教員数が少ないために、次のようなデメリットが出てくる場合もあります。

- ◇ 教員数が少ないため
 - ・ 多面的な見方や考え方が出にくい面がある。
 - ・ 一部の教員の意見で方向が決まってしまう面がある。
 - ・ 人間関係の固定化が、マイナス面となることがある。 等

3 メリットを最大限に生かして

Qにあるようなマンネリ化の悩みも、このようなデメリットが背景にあると考えられます。

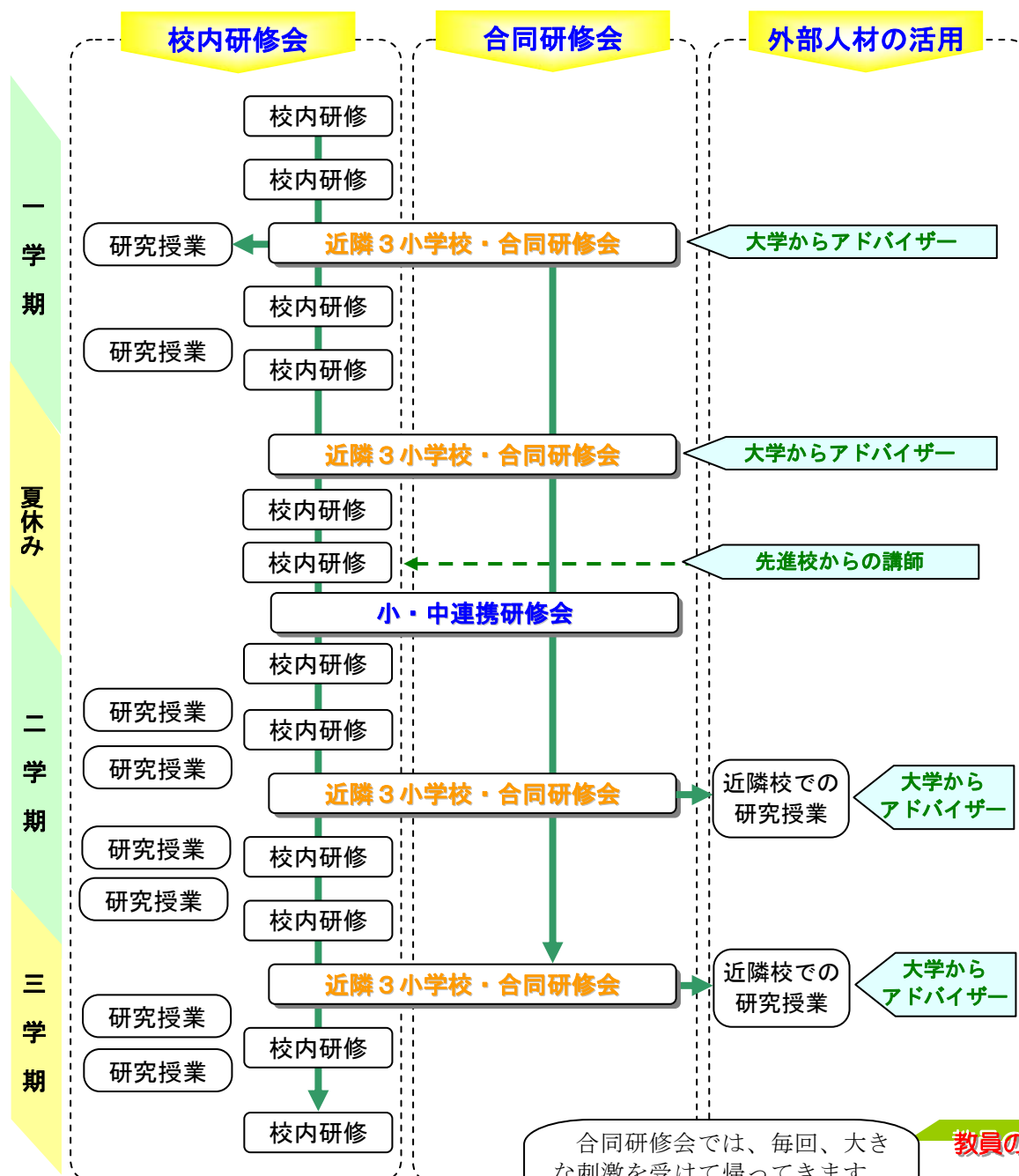
しかし、小規模校では、教育内容の面でも地域・保護者と密着した実践がしやすく、児童生徒一人一人のよさや可能性を発揮させるような実践も取り組みやすいという利点があります。また、何よりも、全校で一致した指導がしやすく研修の成果がすぐに現れるのが最大の利点と言えるでしょう。

このような利点を生かしつつ、一方で、外部の人材を招聘したり、近隣校と協力・連携したり、小中連携の視点を取り入れるなどして、常に校内研修会を活性化するように心がけることが大切です。



「他校と連携し、外部人材を取り入れて、活性化を図る」例

「小規模校（A校）の年間研修日程」の例



※ ここでの「校内研修」は、短時間のものも含まれます。

合同研修会では、毎回、大きな刺激を受けて帰ってきます。それが、校内研修の活性化につながっています。

教員の声



実践のポイント

校内研修のテーマと合同研修のテーマとの関連性を図る。
年度と年度の連続性・発展性を考慮する。

ヒントボックス

例えば、研究指定校や公的研究会の研究発表会等を活用し、校内研修の活性化に結び付けることが大切です。

タイプ

A

B

C

D



Q20 校内研修を構想・計画するに当たって、どのような視点が必要ですか？

Point

- ① 実践的指導力の向上という校内研修の目的を明確にする。
- ② 指導力（授業力）とは何なのか、自校の考えを明確にする。
- ③ 教員の力量を正確に把握する。
- ④ 全教員の積極性を引き出す手立てを考える。

1 学校教育目標 PDCA サイクル 組織マネジメント

校内研修の立案に当たっては、学校教育目標（目指す児童・生徒像）の実現に向け、PDCAサイクルや組織マネジメントの考え方をもとに進めていくことが必要です。

ここでは、そのことを前提として、より具体的な視点をあげてみることにします。

2 より具体的な 視点をもって

1 校内研修の目的は、指導力の向上

学校としての責任、個々の教員の職責を果たすために研修を行うという点をしっかりと押さえておくことが重要です。

2 指導力（授業力）とは何なのか、自校の考えを明確に

校内研修の目的に照らし、その内容を考えたり、その成果を測ったりする時、自校の目指す教師像や学級・学年の理念を全教職員が具体的に理解できていないと、焦点がぼけてしまいます。

3 教員の力量の正確な把握

教員は一人一人その能力に差があります。弱点もあれば得意分野もあります。つまり、教員にも個に応じた研修が必要なわけです。ですから、個々の教員の力量を把握する上でも、2の視点は大切です。（※ Q4、Q12の参考例参照）

4 全教員の積極性をどう引き出すか

教員は、本来指導力の向上の必要性を感じています。校内研修の立案に当たっては、全教員が主体的にかかわれるような工夫をし、積極性を引き出しながら内容の充実を目指すか否かで研修の成否が決まります。

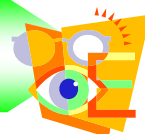
3 これまでの校 内研修の見直し

次ページ（裏面）には、そのほかの視点を対比的に整理しあげてみました。これまでの校内研修を、これらの視点から見直すことから始め、次年度以降の計画に生かしてみてください。



「こんな視点をもって、 校内研修を構想・計画しよう」例

物事には、必ず相対する2側面があります。校内研修を構想する際にも、常にこの両面から考えることが大切です。



視点1

校内研修を活発に（活性化）する視点

- ◇ 校内研修への意欲を高める工夫等

校内研修を深める（深化）視点

- ◇ より質の高い研修とするための工夫等

視点2

教員個々のニーズに応えようとする視点

- ◇ 教員個々の課題や希望等を把握し、研修内容に反映する等

研究指定等、学校の責務を果たす視点

- ◇ 研究指定校として、そのテーマを追跡し最大限の成果を目指す等

視点3

重点化した課題を追跡する視点

- ◇ 重点とした教科や領域等に絞り込んだ研修を行う等

多様な教育課題を幅広く研修する視点

- ◇ 多様な教育課題を幅広く取り上げた研修を工夫する等

視点4

教員一人一人の力量を向上させる視点

- ◇ 全員1回の研究授業の実施等、一人一人の力量の向上を目指す工夫等

学校としての教育力の向上を図る視点

- ◇ 教育課程の改善など、全体にかかわる研究等

視点5

内部人材の能力を十分活用する視点

- ◇ 校内教員の得意分野等を掘り起こし、それらを全校のものとする工夫等

外部の力を活用し補強を図る視点

- ◇ 先進校や大学から、実践家や専門家を招いたり、先進校視察を行ったり等

視点6

自校単独で研究を推進していく視点

- ◇ 外部の人材を活用しながらも、自校だけで研修

他校等と協力・連携し研究する視点

- ◇ 近隣校との連携や小中連携の観点からの合同研究、研究指定校との連携等

視点7

指導の基礎となる理論面の充実の視点

- ◇ 教材理解・児童生徒理解のための研修など指導の土台となる部分の研修

すぐに生かせるスキル面の向上の視点

- ◇ 教材・教具の開発や指導方法の改善・工夫などの研修等

視点8

研修に役立つ資料・情報の収集の視点

- ◇ 研修のための専門誌や他校の研究紀要や出版物等をどのように収集するか

教員への情報提供や成果の発信の視点

- ◇ 収集した情報を効果的に校内にどう伝えるか、また、成果の発信方法等

視点9

短期（年度内）的な視点

- ◇ 年度末を見据え、各学期各月の進行計画を立てる等

長期（次年度以降）的な視点

- ◇ 次年度以降の到達点を見据え、今年度はどこまで目指すか等

タイプ

A

B

C

D



Q21 様々な教育課題に対応するための、効率的な授業研究の方法はありませんか？

Point

- ① 重点化したり、関連付けたりして校内研修で計画的に扱っていく。
- ② 各教育課題の基本事項の共通理解と実践の中での具現化を目指す。

1 様々な教育課題

教育改革の最中、数多くの教育課題が出てきています。

国語力の育成、人権教育、心の教育、ICTを活用した授業、特別支援教育、環境教育、食育（食に関する指導）等々

これらはどれも大切にしなければならない重要な課題であるのは当然ですが、一つ一つの課題に十分な時間をかけて研修することは難しいことです。

2 重点化したり 関連付けたりして 扱う

そこで、その内のどれかを重点化して、計画的に校内研修で扱っていくというやり方も一つの方法です。

もう一つは、それらをうまく関連付けて校内研修で扱うという方法です。

例えば、今年度の研究授業では、どの教科であっても「ICTの有効活用という視点を取り入れた授業をしてみよう」であるとか、「『個に応じた指導』と関連付けて、各学級のLD、ADHDの児童生徒への指導の在り方に視点を当てた授業研究をしてみよう」とか、あるいはまた、各教科における「指導と評価の一体化」を国語力の育成の視点から考えてみるなどがあります。

3 基本事項の共通理解と実践の中での具現化

だからといって、ただ関連付ければよいというものではありません。大切なことは、それぞれの教育課題について、下記のような基本的な事項を、共通理解する好機とすることです。

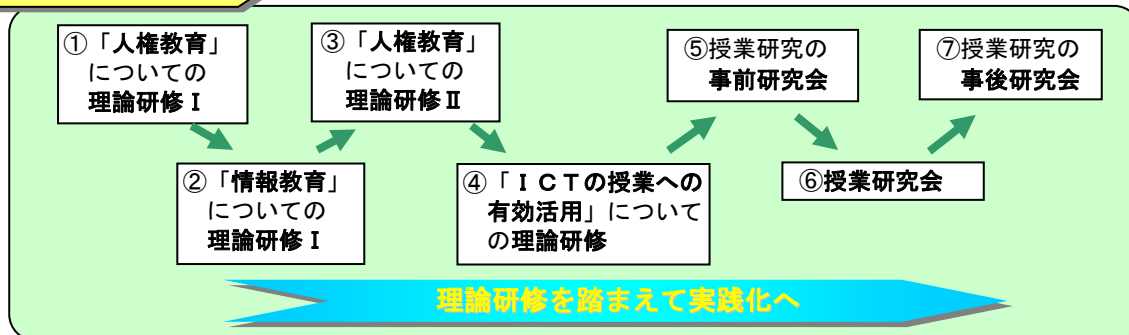
- ◇ その教育課題が出てきた背景は何なのか。
- ◇ 授業の中で扱う時に留意すべき点は何なのか。
- ◇ 先進的な指導事例にどのようなものがあるのか。 など

そして、ただ単に、教育課題を理論研修に終わらせず、具体的に授業の中にそれらの視点を盛り込むことが大切です。つまり、理論を実践の中で具現化するために工夫することにこそ意義があるのです。

参考例

「多様な教育課題に総合的に取り組む校内研修」の例

校内研究会の流れ



指導案の例

1.0 本時の展開 (2/3時間)			
過程	指導内容	指導形態	主な学習活動
導入	前時までの学習の振り返り	一斉	円グラフから江戸時代のそれぞれの割合について振り返る。
展開Ⅰ	農民や町人からも差別された人々のくらしの理解	一斉 個別	本時 [P90] を読み、農民や町人からも差別された人々のくらしについて話し合う。 スクリーンを見ながら、社会や文化の発展のために関わっていた仕事を理解する。 「差別されつづめた技術を持った人々」について教科書上で振り返る。
展開Ⅱ	差別された人々のくらしの理由	個別	「差別」について考える。 次を出しカードに差別に対する自分の気持ちを書く。 「「差別される子どもの考え」」 「僕たちが頑張ることで、差別がなくなればいいな」 「自分たちにはできないこともあるんだ」 「どうして差別をするんだ！」
まとめ		個別	教師の話を聞く。

〇〇市立〇〇小学校
指導者

社会科学習指導案

- 対象 第6学年〇組 (男子 〇名 女子 〇名 計〇〇名)
- 日時 平成 年 月 日 () 第 校時
- 場所 視聴覚室
- 単元 江戸幕府の政治と人々のくらし 『江戸時代に生きた人々』
- 単元 (題材) 設定の理由
同和問題の解決については、これまでに多くの人々の努力と苦勞が多くの実を結んだものの、差別意識など、特に心理面において課題を残しているのが現状である。そのため、同和問題を正しく理解し、様々な人権問題と相互に関連し合っていることに気づくことはもとより、「自らの課題」として認識することが必要である。そうすることが、同和問題を解決しようと主体的に行動する態度の育成につながるかと考えている。
本時の「自分とくらし」の小単元では、身分のきまりを正しく理解するとともに、農民 (百姓) や町人からも差別された人々の生き様に触れる。差別に負けずに生きてきた彼らのたくましさや、「差別を許さない」強い意志を感じ取ることを通して、自分の生活をよりよくするために必要な心構えや、差別された人々が社会や文化・芸能の多大な発展に貢献した事実について学びたい。(個別的な視点 同和問題)

・人権教育の視点
→ 個別的な視点である「同和問題」の解決のため、教科書記述に基づいた史実の正確な理解「差別を許さない」意識の向上並びに実践的態度の育成をめざす。

・情報教育の視点
→ 「同和問題」を初めとする様々な人権を侵害する情報が氾濫する中で、史実 (同和問題との出合い) に関しては正しい情報を教科書記述にそって理解することが情報判断活用能力の育成につながるかと考える。
→ 児童が教科書記述をより理解しやすいようにするために情報機器を手段として活用する。

・授業改善の視点
→ T型学年合同形態にした理由は学年の児童が1つの学習課題に対して先生とともに、共に理解し、将来の展望を持ちやすいと考えたため。また、T型により児童個々の理解を深め、理解に努力を要する児童への細かな助言、様々な発言を拾うことができることを進めたい。

- 児童観 (児童の実態)
- 単元目標
・徳川家康や家光のおこなった政治について関心を持ち、意欲的に調べ、考えながら追究し、江戸時代を生きた人々の願いやそれに対する工夫や努力、また暮らしについて関心を持つことができる。
(社会的事象への関心・意欲・態度)
・江戸幕府の政治や人々のくらしについて考え、大名支配や人々の身分が違いうことに問題意識を持ち、

人権教育の視点が明示された指導案

授業改善の視点も明示されている

情報教育の視点も明示されている

実践のポイント

理論研修だけで終わらせず、必ず授業の中に具現化することが大切。

ヒントボックス

本時案の具体的指導の、どの部分が各教育課題の指導に当たるのか、明示する工夫は？

タイプ

A

C



Q22 授業研究で教科の壁を越えるためには、どうすればよいでしょう？（1）

Point

中学校の授業研究では、教科の違いにより研究が深まらないという意見があります。教科の壁を越えるには次のような方法が考えられます。

- ① 学習指導案作成に当たって、他教科の教員が見ても生徒の活動等がよく分かるように書く。
- ② 生徒の学習活動や理解、習得などを中心に協議する。

1 他教科教員にも分かる指導案

学習指導案で使用される用語には、同じ教科では当たり前であっても、他教科の教員には分からないものがたくさんあります。単元設定の理由や学習活動等、他教科の教員にも分かるように記述することが望まれます。特に、本時の目標や「具体の評価規準」を具体的な生徒の行動の様子や状況として詳細に記述することで、他教科の教員にも授業がどのようなねらいで、生徒がどのような学習活動をし、その目標に達することができていたかなどを把握することができます。他教科の教員に分かる学習指導案の作成は、授業者自身にとっても意味のある研修になります。

2 生徒の活動や学びを共有する

事後研究においては、教材分析について深めることも大切ですが、その教材を使いどのように授業を展開し生徒にどのような活動をさせ、ねらいとした学力を身に付けることができたかどうかことが重要になります。したがって、教材分析の協議にのみに終始するのではなく、最後はねらいを達成するために生徒はどのように学習に取り組んでいたか、また、そのための指示や発問、つまりきに対する支援の方法などが適切であったかなど、指導技術や指導方法が中心になります。そのような協議は、教科独自のものではなく各教科に共通するものであり、他教科の教員も積極的に協議に参加することができます。そのような事後研究会を運営することで、教科の壁を越え、参加するすべての教員の授業力に結び付く授業研究会になります。

また、自分の授業では見ることのない生徒の一面を他教科の授業の参観において発見することは、個々の生徒理解にもつながります。



教科の壁を越える実践例

— 学習指導案の書き方 —

他教科の教員にも分かる学習指導案にするには

[単元設定の理由]

英語

この単元は、現在完了の用法の理解である。現在完了は生徒が理解しにくい時制である。前の単元では、現在完了の継続の導入を行い、動詞の形を理解することができた。さらに、同じ形で経験と完了を表すことができることを理解させ、場に応じて運用できるようにしていきたい。

なぜ、理解しにくいの？
場に応じるって？

他教科にも分かってもらうには・・・



分かりやすく記述する

この単元は現在完了時制(have+過去分詞)の用法の理解である。この時制は日本語には存在しない時制であるため、過去時制と混同してしまい生徒には理解しにくい時制である。前の単元では、現在完了時制の継続の導入を行い、動詞の形を理解することができた。さらに、同じ形で経験と完了を表すことができることを理解させ、今回は遊園地などの場所と、テニスなどスポーツの種目を使って経験を尋ねたり、答えたりさせる。

[本時の評価]

- 積極的に会話や活動に取り組んでいる。(関心・意欲・態度)
- “have been to・・・?”の表現を理解している。(知識・理解)

分かりやすく記述する

- ペアワーク、グループワークで積極的にコミュニケーションを取ろうとしている。(関心・意欲・態度)
- “Have you ever been to・・・?” “Have you ever played・・・?”で尋ね、“have been to・・・” “have played・・・”で答える。(知識・理解)

[主な学習活動]

数学

- ・方程式 $4x - 15 = 9$ に等式の性質を活用し、方程式を解き、その過程から移項を導き出す。

[指導上の留意点]
で分かりやすく
記述する

[指導上の留意点]

- ・方程式 $4x - 15 = 9$ の両辺に15をたし、右辺のみ計算した形ともとの式を比べさせることにより、移項の意味「一方の辺の項の符号を変えて、他方の辺に移すことができる」ことに気付かせる。

実践のポイント

生徒の行動を見て分かる具体的な様子として記述することが大切です。学習指導案作成時に、他教科の教員に見てもらって修正、加筆することで更に分かりやすくなります。

ヒントボックス

生徒の学習活動や評価規準を生徒の行動の様子として見て分かるように記述することは、生徒の反応を予想し、指導上の留意点等が深まり「よい授業」につながります。

タイプ

A

C

D



Q23 授業研究で教科の壁を越えるためには、どうすればよいでしょう？（2）

Point

教科の違いを越えて授業研究を深めるには、次のような方法が考えられます。

- ① 事後研究会において、様々な意見が出せる仕組みを取り入れる。
- ② 批判は、参加者全員の共通課題としてとらえ、提案（改善策）を含んだ形で発表する。

1 様々な意見が出せる仕組み

中学校の授業研究では、教科の違いから意見が出しにくいという理由で社交辞令的な感想のみであったり、逆に授業者の批評だけで終わったりするような状況が見られます。一つの研究授業から参加者全員が学ぶことのできる授業研究にするには、様々な意見が活発に交流されることが大切です。

授業者に遠慮せず意見を出すために、次のような方法が考えられます。

グループ分けして事後研究をする方法

「よかった（参考になった）点」を発表するグループと「改善した方がよい点」を発表するグループに分けます。

グループ分けにおいては、教科の特性を考え、実技教科を中心としたグループとその他のグループに分けるなどの工夫が考えられます。

付箋を活用して事後研究をする方法

参加者が2色の付箋を持ち、「よかった点」と「改善した方がよい点」をメモしながら参観し、事後研究会で課題を整理し、協議の柱を数点に絞って深めるなどの方法があります。

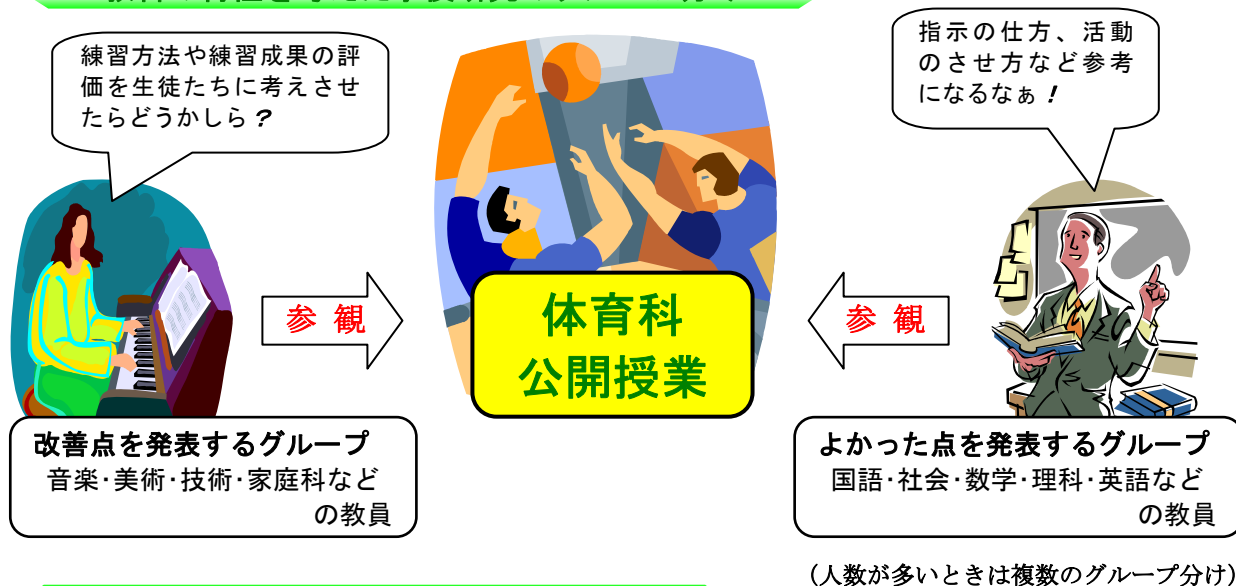
2 課題は全員で共有する

「改善した方がよい点」は、授業者の課題であるとともに多くの参加者の課題でもあります。授業者への批判に集中するのではなく、「自分なら～する。」というような改善策を提案することで各自の課題となり、参加者全員で課題を共有することができます。授業のねらいに達する方法は一つではなくたくさんの選択肢があります。選んだ方法が有効であったのか、他の方法ではどうだったのか、このように改善すればどうかなどというように多くの意見を交流することで、参加者が自己の実践を振り返り、様々な「気付き」を得ることができます。その「気付き」は、教科の違いを越えて、その後の参加者の授業実践の参考になります。

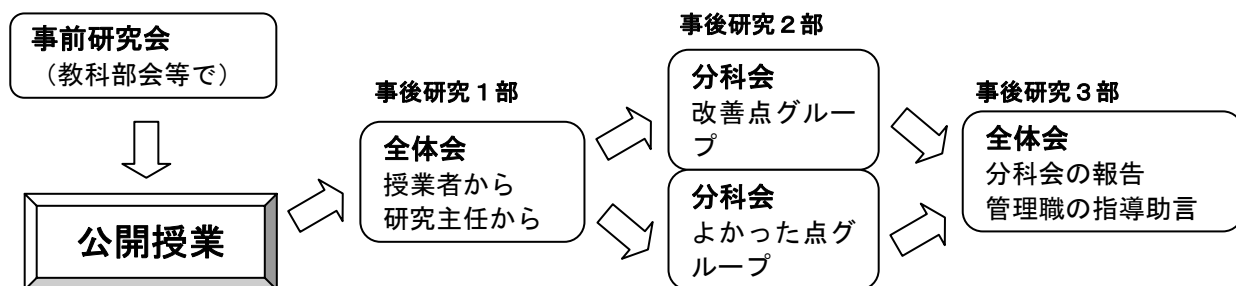
参考例

教科の壁を越える事後研究会 — グループ分けの工夫 —

教科の特性を考えた事後研究のグループ分け



授業研究会の流れ（例１）



授業研究会の流れ（例２）

		第２部				
		1	2	3	4	5
第１部	A					2の1
	B					2の2
	C	〈マス目の中には、職員の名前が入る〉				
	D					多目的室
	E					相談室
		2の1	2の2	2の3	多目的室	相談室 〈会場〉
第3部		全員……多目的室				

◆ 3部構成による事後研究会の振り分け表

- ・ 1時間を3部構成で20分ずつ時間を割り振る。
- ・ 第1部は、AからEの5グループに分かれて、指定された教室で行う。
- ・ 第2部は、1から5のグループに分かれて、指定された教室で行う。
(1部とメンバーが異なる)
- ・ 第3部は、全員が一堂に会して行う。

※1

実践のポイント

全員が気楽に発言できる雰囲気や発言できる機会をつくるのが大切です。
人の発言を否定しないことや特定の人々が長くしゃべらないことで、全員が発言できます。

ヒントボックス

教材研究を中心にしたいときは、教科ごとのグループ分けも必要になります。
授業研究のねらいによって、学年や経験年数など様々なグループ分けを工夫します。

タイプ

A

C



Q24 授業研究で教科の壁を越えるためには、どうすればよいでしょう？（3）

Point

中学校の授業研究では、教科の違いにより研究が深まらないという意見があります。教科の壁を越えるには次のような方法が考えられます。

- ① 生徒の理解や習得などを中心に据えた授業研究会にする。
- ② 全教科に共通する研究主題を設定する。

1 生徒の理解や習得などを中心とした研究

授業は、「指導者」「子ども」「教材」の3つの要素で成り立っています。授業はこの3つの要素が関連しながら本時のねらいに進んでいきます。これらを切り離して話し合うことは難しいことですが、一般に授業研究ではどれかの要素に重点を置いて研究しているということがよくあります。中学校では、生徒がどの場面でどのように学んでいたのかなどを協議の中心に据えることで、教科の違いにかかわらず意見を交流することができます。

また、事後研究会を前半と後半に分け、前半は同じ教科のグループで教材を中心に、後半は教科混合のグループで生徒の学びを中心に協議するなどの方法が考えられます。最終的には、生徒が本時のねらいに達することができたかということが重要で、そのために学習活動が生徒の学びにとって有効であったか、指導者の発問や指示・対応が生徒の学びにとって適切であったかという議論に向かっていくことになります。生徒の学びに関しては、教科の違いを越えて話し合うことができます。

2 全教科に共通する研究主題

全教科に共通する研究主題を設定することで、教科の壁を越えた授業研究を実施することができます。研究主題は、「生徒に付けたい力」「生徒に取り組ませる活動」「教員の指導方法」などに分類できますが、研究主題はどうしても抽象的な表現になりがちです。学校教育目標の具現化とかかわって、より具体的に生徒の行動として見える状況を目標として示すことで、取組内容や研究の成果等について全教科の教員で話し合うことができます。生徒の変容が見える、分かる研究が、授業研究を深化させながら継続していくことにつながります。



教科の壁を越えた研究主題

— 生徒の学びや活動を中心に —

教科共通の取組を入れた授業研究例

研究主題等

具体的な取組例

「基礎・基本の徹底」

- ・全教科において、毎時間復習の5分間小テストを実施する。
- ・学習指導案に基礎・基本を徹底する箇所と留意点を明記する。

「読むことの指導」

- ・全教科（教室での授業）において、毎時間教科書の全員音読を実施する。

「共に学び合う学習」

- ・全教科において、毎時間1回は班の中で「話し合う」「教え合う」「一緒に練習する」などの班学習、班活動を入れる。

「伝え合う力の育成」

- ・全教科において、生徒の話形指導を統一する。
（例）「～と思います。その理由は、…」「まず最初に…」「次に…」など順番を示して説明するなどのルールを教室に掲示する。

「学習習慣の確立」

- ・全教科において、授業規律や学習のルール、予習復習などの家庭学習、提出物の集約、忘れ物などについての指導を合わせる。

「主体的な学びの育成」

- ・全教科で調べる学習の計画や練習の計画を生徒に立てさせる。
- ・単元の学習予定表（目標・内容・評価方法）を生徒に配付し、予定表を生かした授業をする。

教員の声



- ◆ これまで授業研究の討議の柱が明確でなかったが、生徒の具体的な活動を取り上げることで活発に意見が交流されるようになった。
- ◆ 中学校で生徒全員の教科書音読はいかなものかと思っていたが、実際にどの教科でも取り組むことで、生徒の発言や本読みの声が大きくなり、また、授業にめりはりが付くようになった。
- ◆ 一部の教員だけでなく、全員でやっているという実感がもてるようになった。

実践のポイント

抽象的な表現になりがちな研究主題を具体的な取組や生徒の行動の様子として表すことで、全教員の共通理解を図り、教科を越えて協議することができます。

ヒントボックス

具体的な取組については、教員側からの一方的な指導だけではなく、生徒の主体的な活動との連携を図り、生徒の意識を高めることで、学級経営や生徒指導にもつながります。

タイプ

A

B

C

D



Q25 初任者や若年層の教員が多く、授業力の向上が緊急課題なのですが・・・。

Point

- ① 校内の教員の指導力や得意分野を十分に把握する。
- ② 初任者の授業力向上に焦点を当てて、全教員で指導に当たれるような授業研究の年間計画を立てる。
- ③ 各担当者と綿密な打ち合わせをする。

1 隠れた人材を見付ける

どの学校でも、今後、若年教員の増加が大きな課題となってきます。そこで大切なことは、校内の人材をフルに活用することです。どの学校にも、確かな指導力や得意分野をもったベテラン教員が必ずいます。そうした教員の能力を見付け出し、若年層の育成に活躍していただくことが重要です。

2 初任者育成計画を立てる

次に、初任者の授業力向上に焦点を当てて、授業研究の年間計画を立ててみてはどうでしょうか。初任者の研修内容には、経験年数2年目以上の教員にできることやベテラン教員の得意分野を生かせる内容があります。

各教員の持ち味や特性、それぞれの授業力の課題等を十分把握した上で計画を立て、多くの教員が初任者のための研修を分担して指導に当たるようにします。つまり、それぞれの優れた面を発揮でき、また、不十分な点を学べるような研修内容を、「初任者の授業力向上」のためにコーディネートしていくわけです。このことによって、ベテラン教員にとっては、教えることで学ぶ、という相乗効果が期待できます。

3 早期から綿密な打ち合わせを

このような研修を成功させるためには、年間計画を早めに立てて、研修内容について担当者と十分に打ち合わせしておく必要があります。担当者に任せきりにするのではなく、そのねらいや具体的方法を何回かに分けて綿密に相談していく中で、その教員の持てる力を引き出し、さらに、研修への意欲を高めていくようにしたいものです。

ベテラン教員と若年教員がお互いに持てる能力や特性を発揮し合い、互いに高め合っていく、そんな学校にしていきたいものです。



隠されたベテランの技を 若年層の育成に生かす

例1 「集めよう！我が校の達人の技！」

本取組のねらい： 本校の教員の潜在能力を引き出し、さらに向上させるとともに、全体のものとすることによって、全校的な指導力の向上を図る。

- ① 第1回アンケートの目的
- ・本校教員がこれまでの実践の中で身に付けてきた様々な指導法やちょっとした工夫等を引き出す。
 - ・若年層の教員が、日頃の指導の中で悩んでいること困っていることを引き出す。

集約作業

- ② 第2回アンケートの目的
- ・本校教員の持つ指導力を「技・知恵」という形で整理しまとめる。
 - ・整理したものをもとに、日常の指導に生かしたり、校内研修の素材として活用したりする。

第1回アンケート 集めよう！我が校の達人の技！

☆ 「こんなふうにやればうまくいく」 ☆ 「先輩から教わって、私も実行している」 などを教えてください。 先生方がお持ちの授業の技と知恵を集めて、我が校の知恵袋を作りたいと思います。 授業の進め方、子どもへの指示や発問、教室経営など何でも結構です。	☆ 「こんな時はどうすればいいのかな？」 ☆ 「こんなことに困っている」 と感じておられることがあれば、記入してください。 これは第1回のアンケートです。 結果をまとめて一覧表を作り、2回目のアンケートを実施します。
私の技・知恵	質問・疑問

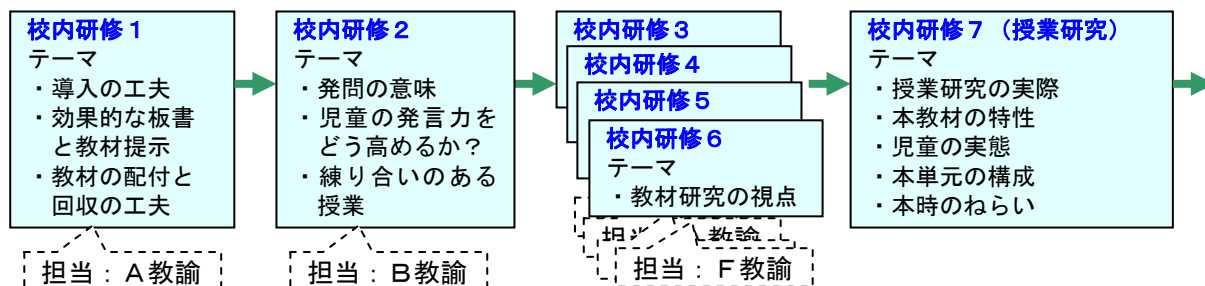
第2回アンケート 集めよう！我が校の達人の技！

☆ 第1回のアンケートへのご協力ありがとうございました。
☆ 第1回のアンケートで出てきた質問や疑問に再度お知恵を拝借したいと思います。
☆ また、新たな疑問もお聞かせください。

質問・疑問	私の技・知恵
① 子ども達の気持ちを集中させる授業の始め方 ② しっかりした理解につながる教材文・問題文を添付する	① 「起立」で全員がしっかりと立って気持ちを落ち着ける時間をほんの少し持つ。それから静かに座る。これだけでも、授業の始まりがずいぶん違います。 ② 長い問題文は、全文を一気に読ませずに、いくつか区切って読ませて、意味を

例2 「みんなで育てよう若年教員」

本取組のねらい： 本校の教員のよさや得意分野を若年層の教員の指導力向上に生かすために、初任者研修に焦点を当てて校内研修を実施するとともに、学校全体の校内研修充実への意欲と意識の向上を図る。



これらの研修は、校内研修の時間をすべて使うのではなく、30分程度を若年教員向けの研修時間として設定して実施した。

実践のポイント

例2：担当者の実態に合わせ、過度な負担にならないような配慮が大切です。

ヒントボックス

例1と例2とをうまく関連付けるような工夫も考えられます。

タイプ

A

B

C

D



Q26 教員個々に、校内研修へのニーズに 差があります。この点をどう考え、どう 対処すればよいでしょうか？

Point

- ① 教員一人一人の校内研修に対するニーズや期待しているものが、
個々の授業力の課題と合致しているか？
- ② 校内研修の本来の目的に対する共通理解が必要です。

1 教員のニーズ と校内研修

^{※1}ある調査によると、「教員の『授業力』向上への意欲は非常に高い（約9割）反面、校内研修への満足度は低い（5割弱）」というような結果が出ています。要するに、教員のニーズや期待するものと校内研修の内容等が一致していないということです。

ここで問題となるのは、教員一人一人が校内研修に対するニーズや期待しているものが、個々の授業力の不足している部分（課題）を認識した上でのニーズや期待であるかという点です。

2 実践的な指導 力との関係

授業力に対する考え方は、諸説多様ですが、一般に次の6点に整理できるのではないのでしょうか。

- ① 子どもを理解する力
- ② 深い教材理解と授業を設計する力
- ③ 確かな指導技術
- ④ お互いに高め合う学習の集団を育成する力
- ⑤ 評価し改善する力
- ⑥ 組織を運営し協働する力

※ 次ページ（裏）参照

たとえば、「授業力の中で、自分は②の力が弱いので、教材に対する理解を深められるような研修がしたい」ということであれば、課題とニーズが合致しているといえます。まずこの点で共通理解しなければ、この問題は解決しないでしょう。

3 校内研修の目 的は

そこで、校内研修（授業研究）の目的は、授業力の向上にあること、つまり、個々の弱点の強化を図るためにあることを共通理解する必要があります。その上で、どのような内容の研修がニーズに合っているのかを考えるべきではないのでしょうか。

意欲を高めるための目新しい工夫をするのと同時に、校内研修本来の目的を問い直すこともまた大切なことです。



個々の授業力の課題を明確にして、校内研修（授業研究）の内容を検討する

① 授業力とは何かを考察し、自己診断票や授業評価票等を作成する。

アンケートを作成するのもよいでしょう。

「授業力」自己診断シート

番号	分類	6つの構成要素	診断項目
1	使命感・熱意・感性	授業改善を目指し、研修に進んで取り組んでいる。	
2	使命感・熱意・感性	学習のねらいをすべての児童・生徒に達成させようとする。	
3	使命感・熱意・感性	教材研究を行って授業に臨んでいる。	
4	使命感・熱意・感性	ものごとに対する幅広い関心をもっている。	
5	使命感・熱意・感性	心と体の調子を整えて授業を行っている。	
6	使命感・熱意・感性	明るく前向きに児童・生徒に接している。	
7	使命感・熱意・感性	学習にふさわしい環境づくりを心がけている。	
8	児童・生徒理解	児童・生徒一人一人の学習意欲を把握している。	
9	児童・生徒理解	児童・生徒一人一人の本時の学習の達成状況を把握している。	
10	児童・生徒理解	児童・生徒一人一人の変化を把握しようとしている。	
11	児童・生徒理解	児童・生徒一人一人のこれまでの学習状況を把握している。	
12	児童・生徒理解	児童・生徒一人一人の発達段階、友達関係、家庭状況等を的確に把握している。	
13	児童・生徒理解	児童・生徒一人一人に気を配り、言葉かけをしている。	
14	児童・生徒理解	児童・生徒の発言や行動を共感的に受け止めている。	
15	統率力	児童・生徒の反応や姿勢に気づき、授業に生かしている。	
16	統率力	学習意欲を高めることを意識して言葉かけをしている。	
17	統率力	基本的な学習ルールを定着させている。	
18	統率力	的確な指示を出して集団を動かしている。	
19	統率力	学習のねらいを明確に示し、学習に見通しをもたせている。	
20	統率力	学習状況に応じて適時・的確な判断を行っている。	
21	指導技術（授業展開）	児童・生徒に学習の準備についての確かな指示を出している。	
22	指導技術（授業展開）	授業の始めに学習のねらいを児童・生徒に明確に伝えている。	
23	指導技術（授業展開）	個に応じた指導を行っている。	
24	指導技術（授業展開）	児童・生徒の主体的な学習を促す工夫を行っている。	
25	指導技術（授業展開）	教材・教具を効果的に活用している。	
26	指導技術（授業展開）	発問の工夫をしている。	
27	指導技術（授業展開）	児童・生徒の反応を生かしている。	
28	指導技術（授業展開）	分かりやすい説明をしている。	
29	指導技術（授業展開）	授業の進捗を確認している。	
30	指導技術（授業展開）	授業の振り返りを行っている。	
31	教材		
32	教材		
33	教材		
34	教材		
35	教材		

※ 2

＜ 授業力とは（例） ＞

- ① 子どもを理解する力
(子どもの内面を理解し、個々の子どものよさや個性を的確に把握するなどの力)
- ② 深い教材理解と授業を設計する力
(教科のねらいを踏まえ、教材の本質をとらえ、単元に構成し、本時の流れを構築するなどの力)
- ③ 確かな指導技術
(個に応じた指導、主体的な学習を促し、思考力を育成するなどの効果的な指導技術)
- ④ お互いに高め合う学習の集団を育成する力
(カウンセリングマインドや好ましい人間関係を築くなどの学級経営の技術)
- ⑤ 評価し改善する力
(個々の児童の学習状況を的確に把握し評価するとともに、自己の指導を評価し改善するなどの力)
- ⑥ 組織を運営し協働する力
(同僚と協働する力やカリキュラム・マネジメントなどの力)

授業参観評価票

番号	観点の項目	評価欄
1	生徒が教師の話に耳を傾けている	
2	生徒が授業の準備物をしっかりと用意しているか	
3	教室の環境整備がされているか	
4	学習規律がととのっているか	
5	あいさつができてきているか	
6	生徒との信頼関係が確立されているか	
7	発表や発言がしやすい集団を作っているか	
8	板書が見やすい読みやすいか	
9	指示の出し方は適切かどうか	
10	考える時間や板書を写す時間が保障されているか	
11	説明は具体的であったか	
12	生徒の反応を予想した適切な質問が投げられているか	
13	個々の生徒の学習状況を確認しているか	

本誌 No. 4
「参観の視点」参照

② 把握した授業力の実態や課題をもとに校内研修（授業研究）年間計画を作成する。

実践のポイント

個々の教員が自分の授業力の課題をしっかりと認識することが大切です。
教員が評価されているという受身のとらえ方をしないような配慮が必要です。

ヒントボックス

「授業力とはいったい何なのか」という根本的な問いからスタートすることも、大切な研修になるでしょう。

教員の研修及び資質能力の向上に関連する法令、答申等

「教育基本法」抜粋

(教員)

第9条 法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。

2 前項の教員については、その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない。

「教育公務員特例法」抜粋

(研修)

第21条 教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない。

2 教育公務員の任命権者は、教育公務員の研修について、それに要する施設、研修を奨励するための方途その他研修に関する計画を樹立し、その実施に努めなければならない。

1 「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」

教育職員養成審議会第一次答申（平成9年7月）

2 「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について－現職教員の再教育の推進－」

教育職員養成審議会第二次答申（平成10年10月）

3 「養成と採用・研修との連携の円滑化について」

教育職員養成審議会第三次答申（平成11年12月）

4 「今後の教員免許制度の在り方について」

中央教育審議会答申（平成14年2月）

5 「新しい時代の義務教育を創造する」

中央教育審議会答申（平成17年10月）

6 「今後の教員養成・免許制度の在り方について」

中央教育審議会答申（平成18年7月）

(京都府)

「教師力」向上に関する検討委員会（平成18年11月）抜粋 「求められる京都府の教員像」に関する提言

- 児童生徒に対する教育的愛情と、教職に対する使命感・情熱を持っていること。
- 豊かな感性を持ち、明朗かつ健康で、人間的魅力にあふれていること。
- 高い「授業力」を持ち、児童生徒に確かな学力をつけることができること。
- 社会的良識と自ら学ぶ意欲を持ち、児童生徒や保護者、職場の同僚、地域の人から信頼されること。
- 「ふるさと京都」への理解と愛情を深めるとともに、国際的な視点に立った教育を推進することができること。

「具体的な人材育成方策」に関する提言 【研修段階】—「教師力」の向上

- 時代や社会の大きな変化に対応するため、教員の育成に関して、府・市町村・学校がそれぞれの役割を明確にし、教員の経験や職務に応じた「教師力」向上のシステムを構築する。
- 府総合教育センターの機能を抜本的に見直し、より精選された研修の実施主体となることに加え、学校等への直接的支援機能を強化しながら、京都府の研修全般を一元的にコーディネートする機関に位置付ける。
- 地元京都の大学や経済界、産業界との連携・交流による先駆的・効果的な取組を実施し、モチベーションの向上を図り、教員としての専門性を高め、社会性を身につけさせる。
- 学校は教員の資質能力を向上させる基本的な場であり、各学校が自律的に人材を育成する仕組みを構築するために、校内研修の活性化を図るとともに、教員が主体的な取組を行うための環境を整備する。
- 今後の大量退職・大量採用に伴う年齢構成などを踏まえ、優秀なミドルリーダーや管理職の育成方策を検討するとともに、意欲ある退職教員を有効に活用するシステムを構築する。

<引用・参考文献等>

- Q 4 ※1 小・中学校授業実践指導者養成特別講座における京都教育大学高乗秀明教授の講義を参考に整理
- Q11 ※1 独立行政法人教員研修センターのホームページ
- ※2、※3 資料提供：国立教育政策研究所総括研究官 千々布敏弥先生
- Q12 ※1 資料提供：国立教育政策研究所総括研究官 千々布敏弥先生
- Q14 ※1 大瀬俊昭・佐藤学 「学校を変える 浜之郷小学校の5年間」(小学館) 2003
- Q15 ※1 「算数科：学力アップ大作戦！－「分かる・できる」喜びを味わわせる授業の創造－」(明治図書) 2006
- ※2 「楽しい算数の授業(4月号ー第248号)」(明治図書)「気軽な「ミニ」指導案」 岡崎市立竜美小学校 仲田美知子 2006
- Q23 ※1 村川雅弘 編著「ワークショップ型研修のすすめ」(ぎょうせい) 2005
- Q26 ※1 東京都教職員研修センター 「学力向上を図るための指導に関する研究－「授業力」向上のためのOJTシステムの開発－」より
- ※2 東京都教職員研修センター 「授業力」自己診断シート

<その他の参考文献等>

- | | |
|---------------------|--------------------------------------|
| 稲垣忠彦・佐藤学 | 授業研究入門(岩波書店) 1996 |
| 千々布敏弥 | 日本の教師再生戦略(教育出版) 2005 |
| 佐藤学 | 教師たちの挑戦(小学館) 2003 |
| 稲垣忠彦 | 授業を変えるために カンファレンスのすすめ(国土社) 1986 |
| 稲垣忠彦 | 教師教育の創造(評論社) 2006 |
| 羽豆成二(編者) | 校内研究・研修の進め方(文教書院) 1993 |
| 河北隆子・脇経郎 | 小学校「教師力×学校力」ダイナミック変革への実践本(明治図書) 2006 |
| 藤岡完治・澤本和子 | 授業で成長する教師(ぎょうせい) 1999 |
| 高乗秀明・浅井和行 | コミュニケーションとメディアを生かした授業(日本文教出版) 2003 |
| 綾部市立中筋小学校 | 習熟度別授業でほんものの算数の学力をつける(黎明書房) 2004 |
| 矢部敏昭・杉谷一司・敦賀市立中央小学校 | 授業の「質」を高める新しい算数の学習(明治図書) 2004 |
| 浅井和行 | メディア教育と生活科・総合的学習(日本文教出版) 2001 |
| 堀井啓幸・黒羽正見 | 教師の学び合いが生まれる校内研修(教育開発研究所) 2005 |
| (独) 教員研修センター | 研修の企画・運営 講師のための知識・技術 2006 |
| 神奈川県立総合教育センター | 校内研修ハンドブック 2005 |
| 広島県教育委員会 | 校内研修ハンドブック 2003 |
| 秋田県総合教育センター | 教員一人一人が目標を明確にした研修の在り方 2005 |
| 広島市教育センター | 授業研究ハンドブック 2005 |
| 高知県教育センター | 校内研修サポートブック 2005 |
| 横浜市教育センター | 授業向上の鍵 2006 |
| 広島市教育センター | 授業研究ハンドブックⅡ 2006 |
| 香川県教育センター | これからの校内研修の在り方 2007 |

(順不同)

校内研修ハンドブック

— 授業研究の充実を目指して —

発 行	平成 19 年 3 月 京都府総合教育センター
〒612-0064	京都市伏見区桃山毛利長門西町
T E L	075-612-3266
F A X	075-612-3267
U R L	http://www1.kyoto-be.ne.jp/ed-center/
E-mail	ed-center@kyoto-be.ne.jp